
地方都市物語・6・出会いの運命

asami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地方都市物語・6・出会いの運命

【Nコード】

N2209A

【作者名】

asami

【あらすじ】

「ガイシャが隠したがる事件、怪盗が暗躍しているのでは」

東十無は署内で、奇妙な通報の噂を耳にした。

そして、旭川にいる刑事課課長である叔父からの電話。

同じ事が旭川でも起きている？

水面下で起きている事件、これは現代の怪盗の仕業なのか？

男装の泥棒アリアと東十無の馴れ初めの物語。

1・奇妙な事件

これは、アリアと東十無が出会ったある事件の話である。

「……どうもすっかりしない事件があつてね」

東十無の叔父、東俊介は、あずましゅんすけため息をつきながら、「というか、事件にもならんのだがね」と言つて、電話口で唸った。

「どういふことですか？」

旭川東警察署刑事課課長である叔父は、その奇妙な事件を東十無に詳しく話してくれた。

三週間ほど前、旭川市内で一件、窃盗事件の通報があつた。

パトカーが現場に急行すると、その家の主人が応対して、間違ひだつたと警官を引き取らせたという。通報者はその家の家政婦だつた。

念のため家政婦からも事情を聞きたいと申し出たのだが、夜も遅く、近所迷惑だから早く帰つてほしいという横柄な態度だつたらしい。

そして昨夜、同じように賊が入つたと年配の男から通報があり、その直後に再度若い男の声で、今のは見間違ひだつたと連絡してきたのだ。

どういふことが尋ねたところ、別荘の管理人が自分のことを泥棒だと思つて早とちりして通報したのだという。

その若い男は、別荘の持ち主の息子だと名乗つた。電話口で管理人と代わつて話しをしたが、年配の管理人は不振な様子もなく、すいませんでしたと誤報を認めたのだつた。だが、それで終わらなかつた。五分も経たないうちに、今度は怯えた様子の若い女性から、声を潜めて通報が入つたというのだ。

その女は、若い男——ふじたかずき藤田和輝は、嘘を言つていふというのだ。人影を見た。だがすぐ逃げて行つた。誰かに狙われているようだ、と。彼女は怖いので来てほしいと泣きそうな声で懇願し、早口で住所を

告げて電話を一方的に切ったということだった。
いずれも通報後、被害者が事件を否定している。本当に誤報だったのか。

二件目の通報後の若い娘の助けを求める声。これはもしかして、都内で起きている、あの件と同じなのか。

十無は管内で耳にしたある噂が頭に浮かんだ。

「D、でしょうか？」

話を一通り聞き終えた十無は、あまり口にしたくない名前を言った。

「やはり、そう思うか？」

叔父も同じことを考えていたようだ。

「こんな地方でも、その可能性があるだろうか」

叔父の声は自信がなさそうだ。

「東京から飛行機で約一時間半ほどでしたね。遠いようで近いかもしれない」

「十無、旭川へ来て手伝ってくれないか。Dの事件にかかわっているのだろうか？」

「かかわっているというほどではないですが」

つかみ所のない泥棒が暗躍しているようだ。

被害届けの出ない事件。被害者が公にしたくない金。そんな金が闇から闇へと盗み去られているのではないか。

旭川にいる叔父に、十無が何気なく電話口でそのことを話題にしたのは、一週間前のことだった。

東京と旭川という離れた場所に住んでいて、顔を合わすのは年に数回程度だが、十無はこの四十八才になる叔父を信頼し、気にかかることがあると電話でよく相談していた。

当初、この事件にもならない奇妙な出来事は都内で確認された。

始めは誰も気づかなかったのだが、署内で奇妙な噂話として流れていたのを、たまたま小耳に挟んだ十無が捜査対象でもないのに、興味を持ったのだった。

悪戯や誤報自体、かなりの件数がある。不振な誤報だと見分けるのは難しい。だが、その中でも担当者がこれは変だと感じる通報がここ数年のうちに何件かあったらしい。

「何か水面下で、掘みきれない事件が起きている。ガイシャが、隠したがるような事件。怪盗が暗躍しているのではないか」

次第にそれは都市伝説のような、奇妙な噂話として所轄の警官達に広まっていたのだった。

それらにはいくつかの共通点があった。

第一通報者は、使用人、またはその家の財産管理状況をよく把握していない者。そして、その後、誤報だったと連絡してくるのは決まってその家の主だった。

いずれも資産家ばかりというのが、十無には引つかかっていた。噂されているように、何かが水面下で起きている。皆は噂に過ぎないと言って一笑に付し、真面目に取り上げようとしなかったのだが、十無は違っていた。

そんな噂に十無が興味を持った頃、管内で白昼に窃盗事件が発生したのだった。

十無が同僚と駆けつけてみると、不動産会社社長は自宅寝室の床下にある開いたままになった空の隠し金庫の前で、警官がいる中、座り込んでいた。

「Dだ。奴が俺のところまで……」

放心状態の社長はそう口走って呆けていた。

通報者は、買い物から帰宅したばかりの家政婦だった。

連絡を受けて会社から真っ先に飛んできた社長は、空の隠し金庫を見て愕然としていた。

警官が先に到着してしまい、隠し金庫の存在を隠しようもなく、社長は諦めきつた情けない顔をしていた。

「いや、その、あまり金は入っていなかったんです。本当です」

「だから、一体いくらあったんですか？」

「五百万、いや、百万かな？」

それにしては、頑強な隠し金庫だった。

「Dって、誰です？」

「え……いや、そんなこと言ったかな？」

丸々とした体格の社長は、広がりつつある額に脂汗を流しながら、十無の質問にしどろもどろに答えた。

「現金だけですか？」

「いや、いえ。——はい」

どうも要領を得ない。

鑑識係が辺りを調べたのだが、手掛かりとなるようなめばしい物証は出てこなかった。

「こりゃ、プロですね」

鑑識係が十無に耳打ちした。

同僚のベテラン刑事、あまみや天宮は、汗だくになっている社長を落ち着かせるため、別室に移動させた。

十無は警察に連絡した家政婦に事情を訊いた。

「いえね、帰って来たら、ちゃんと玄関の鍵は閉まっていたんですよ。それで、部屋を掃除しようと思ったら、こんなことになっていて。そりゃあ、驚きましたよ。で、慌てて通報したんです」

五十代位の人の良さそうな小太りのその家政婦は、興奮冷めやらず、十無に向かって一気に話した。

「そのあと、旦那様にも連絡したら、それが凄い剣幕で怒られて。でも、泥棒に入られたのは私のせいじゃないでしょう？ 鍵もかけ忘れちゃいないし。ねえ、刑事さん」

家政婦は自分は悪くないということを、しきりに繰り返して訴えていた。

あの社長は泥棒に入られたことを責めたのだろうか。もしかしたら、通報したことを怒ったのではないか。

十無はふとそう思った。

緊急配備もしかれたが、夜になっても何も手がかりもなく、被疑者は捜査網にかすりもせず、まんまと逃げられてしまった。

結局、その社長は当初言っていた金額より遥かに少ない、現金二十万円の盗難届けを出して、手掛かりがない状態で二ヶ月が過ぎ、今日まできたのだった。

手口から割り出そうとしても、該当する常習犯はいなかった。全くのノーマーク。しかも、かなりのプロのようだった。

そして、今回の旭川での不振な通報。叔父からの勧めもあつたのだが、十無はいても立つてもいられず、上司に相談して出張を願いだったのだった。

これは広域窃盗犯。それもグループでの犯行かもしれない。となると、所轄刑事の出る幕ではないのだが、ここまで情報を掴んでおきながら、本庁に持っていかれるのは尺に触る。

税金になるはずだった金。裏金や脱税の金品をよく狙う泥棒。通称、Dという泥棒の存在。被害者はDに狙われたことが公になれば、脱税の疑いをかけられるという理由で、ほとんどが盗難届けを出さないという困った現象が起きているのではないか。

今ならまだ、『現金二十万円の空き巣』だ。

旭川の通報も、もしかしたらただの偶然かもしれない。

十無は軽く考えていた。

東京は春一番が吹いて暖かい陽気が続いているが、旭川はまだ雪が残っているのだろうか。この薄手のコートでは張り込みには寒かったかもしれない。

十無は機上で、これからの捜査のことを考えて意欲をたぎらせて胸躍らせていた。

この事件が、十無を追い込むような顛末になるとも知らずに。

旭川へ着いた東十無は、真っ先に東警察署を訪れた。

といつても、慣れないバス利用に手間取り、たどり着いたのは昼だった。

「ご苦労さん、まず飯でも食つか」

気さくな十無の叔父、東俊介は快活な笑顔で迎えてくれた。

三月の北国。旭川は暖かい日差しがさしているものの、まだ雪中だった。

道路はところどころ雪のない部分が見え、気温が上昇したせいで雪が溶け出していたが、道路脇にはうず高く積まれた雪の山がどんと居座っている。

解けてシャーベット状のざくざくとした雪道は、真冬よりも遥かに最悪の道路状況だった。

車を通る度、車道から跳ねる泥雪に気をつけながら、五分ばかり歩いて十無と俊介は料理屋に行った。

俊介は定食を二つ頼み、グラスの水をがぶりと一気に飲み干して、フウと一息ついた。

「今朝、捜査員を例の家に——それは別荘だったのだがね。早速、行かせてみた」

十無は相槌を打ちながら、黙って話の先を促した。

「だが、藤田和輝に何も変わったことはありませんと、追い返されてしまった」

「女性は？」

「玄関先には出てこなかったらしい。女からの通報のこと話したのだが、何かの間違いだと言い張って、女とは会わせてくれそうもなかったようだ」

「何か、ありますね」

「向こうさんも、警察沙汰は困るようなことがあるのだろう」

「とりあえず、張り込むしかないですね」

「捜査員を一人、十無に同行させよう。何か出てきたら直ぐ私に連絡をしてくれ」

「わかりました」

「ところで、十無。まだ身を固める気はないのか」

東俊介がさばの塩焼きをつつきながら、ちらりと十無に目をやった。

嫌な話題になった。十無は一瞬言葉を詰まらせたが、「今は仕事が

楽しいですから」と答えた。

「そうか、その気になったらいつでも紹介するぞ」

十無は叩き上げの刑事である叔父のことを尊敬していたが、家庭を持って一人前だという昔気質の持論には閉口していた。何かというこの話が持ち上がる。

「まず、足元を固めろ。しっかりした女房を持たなければ、刑事としても伸びないぞ」

「はあ……」

十無は生返事をした。

家庭と仕事は別だと思うが。

だが、十無はそんなことは口が裂けても言えなかった。

意味もなく愛想笑いを浮かべながら、十無はただ頷いていた。

女性は苦手だった。今までいい思いをした記憶はない。刑事を選んだのも、男職場で女性とのかかわりが少ないのではという理由が、僅かばかりあった。勿論それだけではないのだが。

ところが実際は、婦警との見合い結婚が多く、早くから縁談の話が飛び交う世界だった。上司はこぞって見合いを勧めてくるのだ。

それは十無が将来有望と見込まれる優秀な警官だということに他ならないのだが。

今の生活に満足しているし、仕事も楽しい。女性と付き合うなど、煩わしくて面倒なだけだ。これ以上何がいるというのだ。

叔父、東俊介の家庭円満の秘訣を聞かされながら、十無はそんなことを思っていた。

話し好きな叔父と、少し長めの昼休みを過ごした後、叔父は刑事課課長の顔になり、捜査員を一人、十無に紹介した。

「じゃ、頼むぞ」

十無は課長に軽く敬礼すると、その捜査員を連れ立って、例の別荘へ車で向かった。

運転は同行してくれた捜査員が行ってくれた。

「こっちは初めてかい？」

「いえ、生まれはここなんです。でも直ぐ引越して。祖母がこちらに住んでいます、滅多に来ることはありませんし、冬は初めてですね」

「ほお。そっい、課長の甥っ子だもんなあ」

道中、人懐っこい話しかけに、十無は少し戸惑いながら答えた。車は解けた雪をジャブジャブいわせて悪路を走った。これが夜になるとまた氷点下に冷え込んで解けた雪はつるつるの氷となって、道路はアイスバーンになるという。

まるやまいわお

丸山岩雄という盗犯係のその刑事は、厳つい名前に似つかわしくない柔和な笑顔で、別荘へ着くまでの間、始終、十無に話しかけた。

「俺のことは、『丸さん』でいい。みなそう呼んでいる。あんたのことはなんて呼べばいい？ 課長と同じ苗字だしなあ。……トムでいいか」

そのまんまだ。

丸さんのペースに乗せられ、十無はつい苦笑し、「いいですよ」と言った。

叔父の話だと、これでなかなかのやり手だという。歳は五十代前半か。警官にしては小柄で、四角い顔に白髪混じりの角刈り頭。細い目は笑うとなくなってしまう。

「ほら、着いたぞ」

そこは住宅街だった。別荘といっても市内にあり、セカンドハウスといったところか。

高台にあるそのログハウス風の邸宅は、一目で普通の住宅ではないことがわかる凝った造りだった。

高台のすぐ下に走る道路を通る時、建物を見上げると、市内を一望できる窓が大きく取られているのが見えた。

十無達は、その邸宅から数メートル程しか離れていない、住宅街の一角に車を止めて様子を伺った。

「——藤田和輝ですがね、現在二十二才で、東京の大学を今年卒業

する予定で、その後は父親の会社に就職が決まっているそうだ。藤田の父親は、地元では中堅企業の藤田建設の社長ですがね、一人息子は我が儘し放題らしい。管理人の話によれば、今ここに滞在しているのは数人の大学の友人らしいな」

「数人って？」

「出入りが激しくて、一体何人いるのかわからないそうだ」

「やれやれ。で、その中に、通報した女の子もいるんでしょうか」

「多分ね。しかし、今時の娘は男の家に平気で泊まるもんですかねえ。もし、私の娘がそんなことをしでかしたら、びしっと言ってやるんですがねえ」

「さあ、どうでしょうか」

十無は今時の娘の事情を知らないのです、そう答えるしかなかった。どうしようか。車が滅多に通らないようなこんな住宅街で、長時間停車していたら、目立ちすぎて張り込みには無理がある。

「……もう一度、訪ねてみますか」

「それしかないでしょうな」

丸さんも同じことを考えていたのだろう。直ぐにそう返事をして頷いた。

二人はその邸宅の大きな玄関ドアの前に立って、顔を見合わせてからインターホンを押した。

「はい」

男の無愛想な声がインターホンから返ってきた。

「警察の者ですが、こちらに若い女性が……」

「女？ どのことだ？」

十無の話を遮り、男はそう切り返してきた。

「名前はわかりませんが、何人かいるのであれば、皆さんにお聞きしたいのですが」

「今はいない。出直してくれ」

そう言い捨てて、男はインターホンを一方的に切った。

二人はその場で顔を見合わせた。

「インターホンじゃ、取り付く島もない」

丸さんは顔をしかめて角刈り頭をかいている。

「困りましたね。夜に出直しましょうか」

「刑事さん、待って！」

二人が引き返そうとした時、玄関扉が勢いよく開き、長い髪の若い女性が飛び出して来た。

「おい、余計なことを言うな！」

先ほどの声の主がそれに続き、彼女の腕を掴んで家へ引き戻そうとした。

「君、乱暴はよしなさい」

「あんたは黙ってろ」

背丈が百八十センチ以上はありそうなその若い男は、女の腕をしっかりと掴んで、十無に鋭い目を向けて凄んだ。

「彼女は我々に用があるようだ」

「用はない！ さつさと帰れ」

男は間に入った十無の肩を軽く小突いた。

よし、いいぞと、十無は内心ほくそえんだ。早速、常套手段を使った。

「公務執行妨害で署まで同行してもらおうか」

「何だと？」

「警官に手を出したら、どうなるかわかっているのかね？」

丸さんも穏やかな笑みを浮かべながら、追い討ちをかける。

男はその一言で怯んで女から手を離し、肩を落として急におとなしくなった。

「わかったよ。親父に知れたら、俺……」

彼が藤田和輝だった。まだ学生気分の抜け切らない子供臭さを残している藤田は、情けない声を上げてうなだれた。

「ここで話を伺っていいですか？ お邪魔しますよ」

有無を言わず、十無は玄関へ進んで丸さんもそれに続いた。

若い女は慌ててその先に立ち、居間へ案内してくれた。

居間は吹き抜け天井になっており、カット硝子がきらびやかに輝く豪華なシャンデリアがつるされて、その側に幅の広いゆつたりとした螺旋状の階段が場所をとっている。

壁は木目が美しく、大きな暖炉を囲むようにどっしりとした重厚感のあるソファが置かれ、足元には毛皮が敷かれている。ログハウスの雰囲気もありながら、貴族趣味の感じられる室内だった。

外から目立って見えた大きな窓からは、市内が一望できた。遠くにパルプ工場の煙がたなびいている。

十無は丸さんと並んでソファに腰掛けたのだが、体が沈み込んで居心地が悪く、何度か座り直した。丸さんの方を見ると、同じことをしていたので十無は思わず苦笑してしまった。

十無は一般庶民には縁遠い世界に足を踏み入れた気がした。

「紅茶ですけれど、口に合うかしら」

目の前に、二客のブルーオニオンのティーカップが置かれた。

先ほどの若い女が、柔らかい物腰でティーポットに手を添えて、並々と紅茶を注いだ。

彼女は地味なグレーのワンピースを着ているが、艶やかな長い黒髪にうまく調和して、それが一層彼女の美しさを際立たせていた。

日本人形のようなだ。

十無はつい、彼女に魅入ってしまった。

何処か優雅な雰囲気を漂わせている彼女は、藤田の幼さが残る荒っぽい態度とは対照的で、落ち着きがあり、彼より年上に感じられた。

この二人は恋人なのか。確かに藤田和輝の外見は、女にもてそうな容姿の整った好青年だ。しかし、どう見ても体育会系の和輝と、大人しい雰囲気で落ち着き払った彼女とは、ちぐはぐな印象をぬぐえず、接点がないように十無は感じた。

彼女が刑事達と向かい合わせにソファに座ると、ふわっとオレンジベルガモットのエキゾチックな香りが漂った。

「ほう、変わった香りだ」

丸さんはカップに鼻を近づけて匂いをかいでから、一口飲んだ。

「アールグレイです。最近では紅茶もペットボトルで売っていますけれど、香りがなくて」

丸さんは、「うん、いい香りだ」と言ってお飲んでいる。

十無も口にしたが、紅茶といえばたまに飲む缶入りの甘い紅茶しか飲んだことがなく、砂糖が入っていない渋めのアールグレイは苦いだけのように感じられた。

「お砂糖入れますか？」

彼女はそれを察したのか、口に手を当ててくすつと笑った。

十無は子ども扱いされた気がして、面白くなさそうに「いえ、いいです」と無表情で答えた。

「で、用件は何ですか？ 刑事さん」

さつきから落ち着きなく居間をうろろしていた和輝が、苛ついた口調で話を促すように言った。

「ああ、そうでした。まず、こちらのお嬢さんから話を伺いましょう。私に言いたいことがあるんでしょう？」

丸さんが愛想よく言った。

「ええ……」

彼女は和輝の顔を窺い、同意を求めているようだった。

「留美、さつさと話せ」

そう言ってお和輝はふいと窓の外を向いた。

藤田にそう言われ、彼女は恐ろしい出来事を思い出したのか、緊張からなのか、色白の美しい顔を少し青ざめさせて話し始めた。

「今朝、こんなものがあつたんです。私、怖くて。和輝さんは悪戯だっけ言うけれど」

彼女はビニール袋を取り出し、テーブルの上でそれを注意深く逆さにして、その中に入っている細かく千切られた紙を出した。

十無と丸さんは白い手袋をはめると、その三十片余りある紙の、文字が印字してある部分だけをつなぎ合わせて覗き込んだ。

『貴殿の所有する、ダイヤを頂きたい』

手紙の中ほどに、ワープロ打ちされた文面が読み取れた。

その手紙は宛名もなく、無造作に四つ折りにされて、今朝、郵便受けに入っていたのを和輝が見つけたのだという。

「予告状か。一昔前の小説に出てくる怪盗気取りだな」

手紙を細かく千切ったのは和輝だった。警察に届けようと彼女が言っただが、塵箱に捨ててしまったのだという。

「俺が捨てたものを留美がわざわざ拾い集めたんだ。それも箸で」
和輝は嘲るように笑った。

「だって、こういうものって指紋をとったりするんでしょう？ 刑事さん。だから、手紙は和輝さんしか触っていませんから」

彼女は真剣な眼差しを、二人の刑事に向けた。

今までDが予告状を用いたことはない。とすると、これはやはり悪戯なのか。それに、こんなに小さく千切られては、多分、藤田和輝の指紋しか出ないだろう。

彼女は推理小説好きなのかと、十無は苦笑しそうになるのを堪えた。

「馬鹿らしい。留美があんまり怖がるから、誰かが悪戯したんだ」

「誰かとは？」

すかさず、十無が質問した。

「私の他に、和輝さんのサークル仲間がここへ泊まっているんです。今日は今朝早くに春山スキーへ行っています」

「あいつらの悪戯さ。きつと、俺のことを妬んでいるんだ」

「どういうことですか？」

「俺が留美と出会って、連れてきたから……」

和輝の歯切れが悪く、ばつが悪そうに右手で顎をさすっている。

「失礼ですが、お二人はどういう関係ですか？」

丸さんが単刀直入に訊いた。

「お友達です。最近知り合って……」

「留美は美瑛の風景写真を撮りに来ていたんだ。で、俺がナンパして……」

「ナンパだなんて。私、財布を失くしてしまって途方に暮れていたんです。そうしたら、和輝さんがご親切に大勢で泊まっているから、

どうぞって誘ってくださって」

和輝が彼女に気があるのは見え見えだ。はつきりとナンパだと言っている。それなのに、このお嬢様は旅先で出会った見ず知らずの男の家に泊まるという、なかなか大胆な行動をとっている。それとも世間知らずなだけなのか。

彼女は北山留美きたやま るみといい、都内の女子大生で、歳は十九歳！ とのことだった。大学名を訊くと、十無の予想通り、お嬢様学校だった。

「彼女美人だろ？ だから、あいつら……」
「なるほど」

丸さんが大きく頷いた。

留美はそう言われ慣れているのか、あからさまな和輝の言葉に何のリアクションも示さず、ただじつと十無の顔を不安そうに見つめている。

今時、あまり見かけない純和風なお嬢様のつぶらな瞳に見つめられ、十無は顔を赤くして、千切られた手紙の方へ目を移した。

「念のため、この手紙はお預かりします」

「そんなもの、調べても時間の無駄だ。ここにはダイヤなんてないんだから」

「まあ、悪戯ということも考えられますが。皆さんが帰ってきたら、そこを訊いてみて下さい」

「北山さん、こちらにはいつまで？」

「あと、一週間はいる予定です」

「それでは、我々も今夜、もう一度お伺いします」

そう言って十無が立ち上がると、和輝は慌てて近寄り、言いづらそうに声を潜めて耳打ちした。

「刑事さん達、また来るのか？ ……今夜はあいつら、帰ってこないけれど」

「あら、和輝さん、そうだったの？」

留美は初耳だったようだ。

「うん、急にあっちに泊まってくるって、さっき電話があっただ」

和輝は愛想笑いをして、右手で顎をさすっている。

困ったときにそういう仕草をするのがこの男の癖らしい。

和輝は留美さんと二人つきりになるように、初めから仕組んでいたようだ。それはサークルの連中も面白くないだろう。悪戯の一つもしたくなるというものだ。

「じゃあ、今夜は和輝さんと二人なの？ 私、怖いわ」

北山留美は賊を怖がっているようだったが、十無には藤田和輝の方がよほど危険な気がした。

「二人って言っても、管理人夫婦もこの建物内の部屋にいるし、大丈夫だよ」

「でも……刑事さん、泊まっていたくことはできないんですか？」

「無理を言っな。そんなことできるわけがないだろう」

「いえ、いいですよ。私が泊まりましょう」

十無は即答した。もし事件性がないにしても、この魂胆がみえみえの藤田和輝と、世間知らずの北山留美を二人きりにするのは、忍びないと思ったのだ。

「トム、あんまり余計なことに首を突っ込むなよ。面倒なことになるぞ」

「わかっています」

丸さんが二人に聞こえないように、十無に短く忠告した後、「どうもおじゃましました」と言っで軽く会釈をし、十無を残して邸宅を後にした。

十無が泊まることになり、落胆の色を隠しきれない和輝は、顔が引きつっていた。

「私、管理人さんに夕食は三人分になったと伝えてきます」

なんとなく、その場に居づらく感じたのか、留美はそう言っで居間を出た。

「刑事さん、事件でもないのにこんなことをしていいんすか？」

「今のところ、あの予告状が悪戯だとは断定できませんから」

「僅かな可能性でも警備してくれるってわけか。随分親切な刑事だ

な」

和輝は嫌味を言った。

「刑事さん、まさか留美に気があるんじゃないだろうな」

和輝は探る様な目を十無に向けた。

「きみ、何を馬鹿なことを」

「いや、刑事だって男だからな。念のため言っておいた。あいつは俺の女だ」

いけ好かない野郎だ。こいつ、もう彼氏気取りか。留美さんのような女性がこんな男を好きになるはずがない。

十無は知らず知らずのうちに藤田和輝に煽られ、賊を捕まえるという当初の目的から外れて、是が非でも北山留美をこの男から守ってやらなければという思いに支配されていた。

2・予告状

「刑事さん、和輝さんは何故予告状をあんなに細かく千切ってしまったのでしょうか。普通、捨てる時はくしゃくしゃに丸めるくらいで、あんなに千切りませんよね。ということは、誰にも見られくなかったということですよね」

「そうかもしれませんね」

「だとしたら、予告上にあつたとおり、ダイヤは本当にここにあるのではないでしょうか」

「さあ、それだけでは何とも言いえませんが」

北山留美は部屋を案内しながら、目を輝かせて好奇心一杯の顔で、東十無に次々と質問を浴びせてきた。

さつきまで怖がっていたくせに、随分と推理小説かぶれのお嬢様だ。それとも、単に刺激を求めているのか。

口数の少ない、静かな女性だと勝手に想像していた東十無は、いささか閉口していた。

「でも、ダイヤがあつたとして、和輝さんは何故警察に警備を頼もうとしないのかしら。私が何度言っても、相手にしてくれなかったの。でも、刑事さんが来てくれたので良かったわ」

留美は声を潜めて十無に話しかけながら、二階の真っ直ぐな廊下を進み、突き当りにあるドアの前で足を止めた。

「こちらの部屋をどうぞ」

そう言つて、留美がドアを開けてくれた。

我が家同然に使わせてもらっているのか、留美はずっとこの住人だったかのように振舞っている。

「ゆっくり休んでくださいね」

「ありがとう。では、夕食までの時間、夜に備えて仮眠をとらせてもらいます。もし、何か不信な物音などがあれば、直ぐに呼んでください」

「わかりました。心強いわ」

留美は笑顔で部屋のドアを閉めた。

部屋はよく整えられ、まるでホテルの客室の様だった。十無は壁際のシングルベッドに体を横たえると、腕時計で時間を確認してから、目を瞑った。

四時か。二時間程度は眠れる。……藤田和輝は何故予告状を細かく破り捨てたのか。確かに留美さんが言っていたことは一理ある。やはり、藤田は警察にかかわってほしくなかったのだろう。予告状はDの物ではないように思うが……。Dとは別の奴なのか？

あれこれ考えているうちに、十無は眠りの海に沈んだのだった。

「刑事さん！」

留美の叫び声で、十無は跳ね起きて階段を駆け下りた。

「何かありましたか！」

「その窓に人影が……」

留美が青ざめながら指差した窓に、十無は一目散に駆け寄った。窓を勢いよく開けて身を乗り出し、不振な人物を捜した。すでに外は薄暗くなっていたが、目を凝らしてみても静かな住宅街には人影はなかった。だが、窓の下に積もっている雪には、くつきりと足跡が残っていたのだ。

「これは女の足だ」

歩幅は太股だが、足跡は小振りで細かった。

まだ付近にいるかもしれない。十無は玄関に走って外へ走り出た。住宅街の四方を角まで走り、辺りを見回したが誰もいない。

十無が肩を落として玄関に戻ると、郵便受けに一枚のカードが挟まっていた。

十無は手袋をはめてカードを取った。

『二十五日、深夜二時にダイヤを頂きます』

葉書大の白いカードの中央には、ワープロ打ちされた文面があり、宛名も差出人の記載もなかった。

「さっきの女が置いていったのか？ また、予告状とは。今度は日

時指定まである」

「どうかしたのか？」

姿のなかった藤田和輝が玄関へ出て来た。

「藤田さん、どちらにいたんですか？」

「ちよつとトイレに行っていただけだ」

「今、女の人が家の中を覗いていたのよ」

不安そうな顔をした留美が、和輝の後ろで両手を胸に当てて立っている。

でもまさか女の人が泥棒だなんて、ね。と留美は呟き、半信半疑という顔をして首をひねった。

「そんなはずない。あれは悪戯なんだから。きっと、ただの通行人だろう」と、和輝は留美のほうに振り向いて声を荒げて否定した。

「しかし、足跡がありました。通行人であれば、窓の真下まで入って来ないでしょう？ それに、これが郵便受けにありました」

十無は和輝にカードを差し出した。

それを見た途端、藤田和輝は一瞬目を見開き、まさか、と、口唇を僅かに動かして呟いた。

「……北山さん、どんな奴でした？」

「それが、髪が長い女の人でした」

和輝は留美の一言で、見る見るうちに顔色が変わった。

こいつはホシについて何かを知っている。

十無はそう確信し、揺さぶりをかける切り札を口にした。

「……Dという泥棒の噂を聞いたことがありますか？ これは、奴の仕業かもしれません」

藤田和輝の目に、動揺の色が見て取れた。

「警官を何人がよこします。いいですね？」

「いや、でも……」

それでも和輝はおどした態度でなかなか煮え切らず、混乱しているようだった。

とりあえず、居間のソファに和輝を座らせて落ちつかせることにし

た。

ダイヤがここにあるのは間違いない。しかし、藤田和輝は何を迷っているのだろう。やはり、藤田の父親が所得隠しでもしているのだろうか。

もし、そうだとしたら、藤田は噂になっっているDの存在を、父親から聞いているのかもしれない。そして、その中には、Dは女だという情報もあったのだろう。だから、賊が女だと聞いただけで、慌てたのではないか。

藤田和輝は、Dについての噂や情報を少なからず知っている。なんとしてでも訊きだしたい。これはDについて知る、絶好のチャンスだ。

和輝は落ち着きなく目を宙に泳がせている。

十無は腕組をして立って、和輝を観察しながらそんな憶測をめぐらせ、どう協力を取り付けようかと思案した。

「留美、紅茶を淹れてくれないか」

和輝の指示に、留美は頷いてキッチンへ行った。

留美の姿が見えなくなったのを確認してから、和輝は体を十無のほうへ乗り出して小声で話した。

「刑事さん、あれは悪戯だったんだ。まさか本当に予告状が届くなんて」

「どういうことですか？」

「始めのあれは、俺が作った。留美が推理小説好きだと知って、ちよつと怖がらせてやろうと思って。それなのに、留美が警察に連絡すると言いだしたから、慌てて破り捨てたんだ」

なるほど。彼女を怖がらせて自分が守ってやるという筋書きを作っていたのか。どうしようもない奴だ。

顔には出さなかったが、十無は内心、ため息をついていた。

「では、こちらは藤田さんが作ったものではないのですね？」

もう一度、カードを見せながら確認した。

「これは、俺じゃない」

「ダイヤは、ここにありませんね？」

「……」

和輝はうんと言わなかった。なかなか、しぶとい。

「Dの被害は計り知れません。今までの被害額は警察でも把握しきれていない。何故だと思えますか？ 自分にもやましいことがあるのか、皆さん、被害届けを出そうとしないからです。東京だけの事件ではありません。最近、旭川でも同様の被害があったと思われる。全てを話していただませんか？ 財産を根こそぎ持っていけないうちに。怯えて過ごすより良いと思いますが。賊の一人が女だとしても、グループの犯行という可能性が高いと思います。何をされるかわかりませんよ」

十無は和輝の横に屈み込み、優しい口調の中にも、やんわりと恐怖心を煽るように事実を伝え、協力を取り付けるように誘導した。

「親父に知れたら……」

和輝がとうとう口を開いた。もう、ここにダイヤがあると云ったも同然だった。

「カードにははっきりとダイヤと書かれています。ダイヤがここにあると知っているのは、他に誰がいますか」

「それが……かなり、いる。俺、こつそりダイヤを持ち出して…… 普段は家の金庫に保管してあるんだけど。女の子を連れて来たときに、あれを見せると凄く効果があつて……」

和輝はばつが悪そうに、両手で指をいじりながら、もごもごと話した。

何を考えているんだこいつは。金に物言わせて女を口説いたって、何が楽しいのか。空しいだけだろう。

拳骨を張りたい気持ちを辛うじて思いとどまらせ、十無は冷静な口調を保って、耳元で話しを続けた。

「それは、泥棒に来てくれといっているようなものです。お父さんに黙って持ち出しているのであれば、盗まれたとなったら大変なことになるのでは？」

「そうよ、和輝さん。刑事さんにお任せしましょう」

不意に背後から留美の声がして、十無は驚いて振り返った。

トレイにティーカップを乗せて、ソファの直ぐ後ろに留美が立っていた。

厚手の絨毯が敷いてあるとはいえ、北山留美の足音は全くしなかった。それどころか、気配すらわからなかった。猫のようだなと、十無はふと思った。

「お父様は海外旅行中なのでしょう？　あなたが決めなきゃ」

艶やかな花の模様をあしらった、ウエッジウッドのカップをテーブルに置きながら、留美は和輝に促すように言った。

「……わかったよ。でも、制服のおまわりがうるつくのは勘弁してくれ」

「わかりました」

「できれば、あんと、もう一人くらいで、何とか警備ができないか？」

「二人、ですか。それはちょっと、厳しいですね」

「Dって奴、予告状なんか出したことないんだろう？　まだ悪戯つてことも考えられるじゃないか」

往生際が悪く、和輝がこねている。

「何かやましいことでもあるの？」

単刀直入に留美が言った。

「いや、そんなことはないが……」

留美はDのことを説明しているところから聞いていたのだろうか。だとすれば、藤田がダイヤで女を釣っていたことも聞かれたはずだ。藤田の奴、気の毒に。このお嬢様は素直というか、思ったことを真っ直ぐに投げかけてくる。

十無は戸惑っている藤田和輝を見て苦笑した。

早速、十無は応援を呼び、とりあえず丸さん他、私服警官二名に来てもらうことにし、足形を取るために鑑識も要請した。

「藤田さん、狙われているダイヤは何処に保管していますか？」

「一階の俺が使っている寝室の金庫に入っている」

「見せていただけますか」

和輝は渋々頷くと、十無と留美を部屋に案内した。

和輝はベッド横に屈んで、壁の一部をコンと拳で叩き、大学ノート
を二つ並べた程度の大きさがある壁板をはずした。

「まあ、すごい。隠し金庫になっているの？」

留美が感嘆の声を上げた。

その隠し扉は、木目の壁のため境目がわからず、一見したところでは
見つからないようになっていた。

和輝は緊張した面持ちで金庫のダイヤルを回し、小ぶりだが重そうな
扉を開けた。

「これです」

金庫の中にあるビロードの袋に入っている石を取り出し、和輝は
二人の目の前に、手のひらを広げてダイヤを乗せて見せた。

「それにしても、すごく大きいダイヤ。綺麗ねえ」

留美がため息を漏らし、うつとりしている。

「これは、家宝なんだ。いずれ、俺が受け継ぐ。そして、俺の妻に
なる女がこれを見につけることになる」

そう言いながら、和輝はそれを留美の手のひらにぽんと乗せた。

留美の手の平で、見事な大粒のダイヤが怪しい光を放っていた。

「和輝さん、こんな大切なもの、軽々しく他人に触らせてはいけな
いわ」

「留美はいいんだ」

そう言っ、和輝は熱い眼差しで留美を見つめ、留美はその視線
に戸惑ったのか、俯いて頬を紅潮させた。

おいおい、こんなときに女を口説くな。それに、このお嬢様もま
んざらでもないのか。それとも、他の女と同様、ダイヤに目がくら
んだのか。俺の存在を忘れるな。

目の前で愛の世界に浸っている二人に、十無は眉を寄せていたが、
丁度、玄関チャイムが鳴ってラブシーンは中断することになった。

「きつと、相棒が着いたんでしょう」

やれやれと、この場から離れることにほっとしながら、十無は玄関へ向かった。

「丸さん、待っていました」

「どうした？ 何かあったのかね」

「いや、あの二人に当てられて」

十無はそう言って肩をすくめた。

「一人身には辛いな」

少し遅れて、藤田和輝が玄関にやって来た。その後ろに、頬を上げさせた留美が静々としてきた。藤田がキスでも迫っていたのではないか。

彼女みたいな女性が、何故こんなにやけた野郎と……。そう思うと、十無は面白くなかった。

苛々した感情を抑え、丸さんと二人の若い私服警官を居間に通して、藤田から聞いた話と、予告状のことを話した。

「……まるで、怪盗気取りだ。こりゃ、Dという奴は愉快犯かもしれない」

丸さんが唸った。

「二十五日って、明日の夜中だわ」

「明日は、昼過ぎにはサークルの連中も戻って来るけれど」

「事件に巻き込まれる可能性がある。本当に現れるのかわからないが、念のため、悪いがその人達には引き取ってもらった方がいいだろう」

「仕方ない、わかった」

十無に言われて、和輝は面倒そうに返事をした。

二人の私服警官には、外の車に待機してもらい、張り込みを頼んだ。丸さんは二階の部屋から外の様子を伺い、十無は一階の隠し金庫のある部屋で警備をすることにした。

鑑識は窓下の足型を採取して署へ戻った。

足のサイズは二十五センチ、大柄だがやはり女性のものだった。

「刑事さん、ご苦勞様です。夕食、食べそびれてしまいましたね。良かったらサンドイッチをどうぞ」

二十時をまわった頃、北山留美が十無のところへ皿に盛ったサンドイッチを持ってきた。

「ありがとう」

「今夜は休まれたら？ 明日の夜来るんでしょう？」

「泥棒の言うことなんか当てになりません。こちらを欺く、陽動策戦かもしれませんから」

「そうですね。ごめんなさい、素人が口出しして」

「いや、そういうつもりで言ったわけでは……それに、途中で交代して仮眠をとらせて頂きますから」

「そう、良かった」

留美は優しく微笑んだ。心底、体を心配してくれているようだった。

「留美さん、あなたも何処か他の所に泊まった方がいい」

「足手まといでしょうか」

「いや、そうではなくて。危険ですから」

「私、少しわくわくしているんです。推理小説も好きです。だって、こんなこと滅多にないでしょう？ 不謹慎かしら」

やはり、十無の想像通り、留美は相当の推理小説かぶれのようなだった。

「しかし、これは現実です。何が起るかわかりません。貴女の身を守りきれないかもしれない」

「自分の身くらい自分で守れます。こうみえても、柔道の心得もありますから」

やれやれ、これだから暇をもてあましている人種は困る。

十無はそうですかと、愛想笑いを浮かべるしかなかった。

「でも、お若いのに刑事だなんてすごいですね。刑事になるって大変なんでしょう？」

留美は瞳を輝かせながら、十無に羨望の眼差しを向けた。

「い、いえ、ただの公務員です」

十無は五十センチと離れていない彼女から、逃げ出したい衝動に駆られていた。

若い女性と二人きりで、それもこんなに身近で話しをするのは、かなり不得手だった。

意識するまいと思えば思うほど、十無は自分で赤面していくのがわかった。

「留美、ここにいたのか。こっちでワインを飲まないか？」

「ええ、今行くわ。お仕事、頑張ってくださいね」

和輝が部屋に顔を出して留美を呼んだので、十無はほっとした。

ワインか。賊が来るかもしれないのに余裕だな。

十無はサンドイッチにかぶりついた。

じっとしていると眠くなる、十無は時折、部屋の中を歩き回って窓から外を窺った。

今夜は大丈夫だろう。いや、裏をかがれるかもしれない。そう思っ
て気持ちを引き締めた。

時計は二十二時を過ぎた。

「刑事さん……」

留美がドアからそっと顔を出した。

「どうかしましたか」

「あの、居間にいていただけませんか？ 和輝さんがちょっと……」

藤田にも困ったものだ、嫌がる留美さんに言い寄ってくるのか。

留美の困ったような表情を見て、十無は勝手にそう解釈してため息をついた。

「ここを離れるわけに行かないので、丸さん……丸山に行ってもらいますから」

十無は二階にいる丸さんに無線で伝えようとしたのだが、留美はそれを遮った。

「あなたではだめなの？ だって歳が近いほうがお話ししやすいんですもの」

懇願する留美に負けた十無が「わかりました。今行きます」と返事をすると、留美はにっこり微笑んで、待っていますと言って居間へ戻った。

若い女の子の相手は避けたいというのが十無の本音だったが、仕方なく丸さん無線で呼んで、金庫の部屋に来てもらった。

「今夜は何も起こりそうにないですね」

「明日もそうだといいが」

「俺は現れてほしいですけどね。捕まえられるから」

「若いつてのはいいねえ、血気盛んで。私みたいになっちゃ、平穩無事なのが一番って思うようになる」

丸さんはそう言って笑った。

金庫のある部屋を丸さんに任せて十無が居間へ行くと、留美がソファにちょこんと腰掛けて待っていた。

その向かいに和輝が座っている。というか、寝そべっていた。

「藤田さん？」

「和輝さんは寝てしまったんです。ワインを飲みすぎたのかしら」
留美の顔も暖炉の火に照らされているだけではない、紅潮した頬をしていることに十無は気がついた。だが、全く酔っていないようだった。

テーブルには空になったワインボトルが一本と、半分も入っていない飲みかけのワインボトルが置いてあった。

留美さんを酔い潰そうとして、先に自分がダウンしてしまったのか。情けない男だ。お嬢様はお酒に強いらしい。

十無はいいざまだと鼻で笑った。

「一人だと、ちょっと怖くて」

お嬢様のさっきの勢いは何処へやら。しおらしく、ここにいてほしいと十無に懇願した。留美は不安そうにじっと十無を見つめている。

十無は女性が嫌いなわけではないのだが、今まで酷い目に合っているお陰で臆病になり、女性を避ける癖がついていた。

しかし、十無は留美に多少好感を抱いていた。
大人しい女性。でも何処か芯があって、自分を持っている。そんな
風に感じていた。

「刑事さんは、やっぱりワインは飲んではいけないのかしら」

「勿論」と、十無が返事をした。すると、留美は紅茶をマグカップ
に並々と淹れてくれた。

向かい合わせのソファは和輝が寝そべって占領しているため、十
無は仕方なく彼女の隣に座った。

「今夜は興奮して寝付けないわ。子供みたいね」

留美は肩をすくめて、悪戯っぽく笑った。黒髪がさらりと揺れる。
彼女の一つ一つの仕草が、なんとも可愛らしい。華やかさはないが、
可憐な櫻の花弁に包まれているような、優しい印象を受ける。

十無もその笑顔に引き込まれ、自然と笑みがこぼれた。

「よほど推理小説が好きなんですね」

「そうね、わくわくするお話が好きなの。恋愛小説って、退屈で。
だって、相手の行動に一喜一憂するなんて、私、苛々しちゃって。
その点、謎解きって最後はすっきりするでしょう？」

そう言って留美は、ワイングラスをくいつと飲み干した。

人は見かけによらないというのは本当だ。留美はおしとやかなお
嬢様そのものという印象を受けるが、冒険好きな嬢様のようなのだ。

「でも現実には、そうすっきり終わることばかりではないですよ」

「やっぱり、そうよね。刑事さんは何の担当なの？ 泥棒？」

「まあ、そうです」

十無はまだ熱い紅茶をごくりと飲んだ。昼間飲んだ渋い紅茶と違
い、体の芯から温まっていくな感じがした。

「刑事さん、地元の人じゃないでしょう？」

「わかりますか？」

「ええ、言葉が違うもの。北海道って方言らしいものはあまりない
けれど、ちよつと乱暴で、容赦ない言い方をするでしょう？」

「ああ、そういえばそうかもしれませんね」

十無はふと、丸さんの話し方を思い浮かべた。親しみを込めて話しているのだろうが、初対面の人は、少し面食らうかもしれない。

「旭川にはまだ来て間もないのかしら」

「ある事件を追っての出張です」

「あら、じゃあ東京から？」

「はい」

「どんな事件ですか？」

「それは、言えません。守秘義務がありますから」

「そうよね。ごめんなさい」

留美は少しがっかりしたように肩をすくめた。

と、その時、部屋の明かりが突然消えた。

「え？ 停電？」

「違う、他の家は明かりがついたままだ」

十無は素早く窓から外を覗いた。

「じゃあ……」

明るく燃え上がっている暖炉の火が、部屋を辛うじて照らしていた。

「留美さんはここでじっとしていて下さい」

「いや、一人にしないで！」

薄暗い中、窓辺にいる十無に駆け寄って、留美がしがみついていた。

「しかし……」

藤田は全く起きる気配がない。これでは身動きが取れない。

十無は無線で丸さんに応答した。

「こっちは、何も起こっちゃいないよ」

暢気な丸さんの返答があった。

車で張り込んでいる二人にも連絡したが、人影は全くないという。そうしているうちに、明かりがついた。

年配の管理人の男が、居間に顔を出した。

「ブレーカーが落ちたんですよ。今、スイッチを入れたんで、大丈夫

夫。この建物は見かけより古くてよく落ちるんです」

「あーもう、驚いた」

「あのう、手を離してもらえませんか」

「あつ、ごめんなさい」

留美は慌てて十無から離れたのだが、十無は心臓が飛び出そうなほど動悸して、耳まで赤くなっていた。

暗がりでは、賊が来たのではという緊張もあつて、何も感じなかったのだが、明かりがついて自分に抱きついている留美を目の当たりにした十無は、一気に彼女を意識してしまった。

「刑事さん？」

留美が訝しげに十無の顔を覗き込んでいる。

「何でもありません」

どう見ても何でもないようには見えないだろうと自覚していたが、十無はそれしか言えなかった。

仕事中に何をやっているんだ。

自分にそう言い聞かせたが、直ぐに赤面が治まるはずもなく、顔を隠すように、右手を額に当てて俯いた。

再び、すつとジャンデリアの明かりが消えた。だが、今度は壁際にあるランプ型ライトはついたままだ。

「刑事さん、部屋を暗くすると、ここから夜景が見えるのよ」

どうやら、留美が明かりを消したらしい。彼女は大きな出窓の力ーテンを開けて、手招きをした。

「ほら、素敵でしょ？」

十無は彼女に言われるままに、隣に立った。

ぎらぎらした高層ビルの明かりとはまた違った夜景だった。柔らかな街の明かりと目の前のアーチ状の橋のライトアップが優しい光を作り上げて美しかった。

いつの間にか、火が出そうなほど紅潮していた顔の火照りは、治まっていた。

留美さんは俺のことを気遣って、明かりを消してくれたのか。いや、

まさか。

「刑事さん、お名前はなんていうの？」

「東ですが」

「下のお名前は？」

「……十無、です」

「十無さん……」

自然な感じで留美は十無にもたれかかった。彼女の長い黒髪が十無の胸元で揺れる。

「留美さん？」

「少し、酔ったかしら」

黒髪から覗く、留美の白いうなじが暖炉の揺れる朱色の明かりに照らされて、十無の目に妖艶に映った。彼女の体が触っている部分だけ、じんじんと火照って体温が伝わってくる。

あまり女性に免疫のない十無には、それは即効性の猛毒のようだった。

東十無は瞬く間に恋に落ちたのだった。

3・事件発生

二十三日の夜は無事、何事もなく過ぎたのだが、東十無にはちょっとした事件が起きていた。

いや、十無にしてみれば、どんな事件よりも大事件だったのかもしれないのだが。

十無は北山留美を直視できない事態に陥っていた。
自分でも情けないと思ったが、こればかりはどうしようもなかった。

彼女と顔を合わせて赤面する、声をかけられて言葉を詰まらせるといった具合だった。

女性が苦手だという意識からずっと脱却できずに、その事実から逃避していた付けが今、回ってきたのだ。焦れば焦るほど、彼女を意識してしまう。

俺は一体どうなってしまったのだ。

十無は今朝からずっと自問していた。意識の底では、それが何を意味するのか分かっていたのだが、否定したい気持ちがそれを認めようとしなかった。

今は勤務中だ、私情を挟むな。冷静になれ。

十無は必死に自分に言い聞かせたが無駄だった。北山留美を近くに感じる度、高鳴る鼓動。

もうすっかり忘れていた感情が、溢れるように十無の心に押し寄せて占領する。

彼女を避けながら、いつしか無意識に彼女の姿を目で追っている。ティーカップを置く時、前屈みになった彼女の肩から、するりと流れる艶やかな黒髪。笑顔を見せる時に、左手が自然と口元に添えられる仕草。話しかける時、真っ直ぐに相手を見詰める澄んだ琥珀色の瞳。相手を包み込むような、透き通る細い声、ゆっくりとした話し方。その全てがどうしようもなく十無の鼓動を早めてしまうの

だった。

この状態では仕事に差し支えてしまう。俺はこの場にいない方が
良いのかもしれない。

藤田和輝、北山留美、そして丸さんと一緒に、昼食をご馳走にな
りながら、仕事に妥協を許さない真面目な十無は、そんな風に自分
を追い詰めていた。

藤田のサークル仲間達は、午前中、スキーから戻るや否や、旭川
市内のホテルに移ってもらった。始めは文句を言っていたが、藤田
がホテル代は自分が持つからと言った途端、皆了承した。
タクシーを乗り合わせて別荘を後にした藤田の友人達を送り出しな
がら、友人とは名ばかりでいい力モにされている藤田に、十無は少
しばかり同情したのだった。

だが、昼食の間中、しきりに北山留美に話しかける藤田和輝を見て、
そんな気持ちはあつという間に何処かへ吹っ飛んだ。

こいつ、北山さんだけ残して、二人きりになって好都合とも思っ
ているんじゃないのか。危険があるのかもしれないのに。

十無は次第に苛々していく自分の感情を、勤めて顔に出さないよう
にしていたが、声は不機嫌丸出だった。

「……北山さんも危険ですからここから離れた方がいいのでは」

「一人くらい大丈夫さ。俺が守ってやる。俺、結構体鍛えているか
ら、泥棒の一人くらい俺が捕まえてやる」

藤田は自身満々だ。

「いや、犯人は一人じゃない可能性が……」

「こんなに刑事がいるんだから、何も危険はないだろう？ 日本の
警察は優秀だからな。予告状出すような間抜けな泥棒をまさか逃が
すことはないよな？」

この野郎！ 人を小ばかにしたようなことを言いやがって。

ふてぶてしい、嫌味な藤田の言葉に、十無は喉元まででかかった
罵声を飲み込んで頭に血が上るのを辛うじて抑えた。

「藤田さんね、何か起こってからでは遅いんですよ？ 相手は予告

状を出すような大胆な輩です。我々としては、念には念を入れて、安全確保に努めたいわけです。ご理解いただけませんか？」

一緒に食事を摂っていた丸さんが、見かねて助け舟を出してくれました。

「そうよね、やっぱり私がいると足手まといですね。興味本位で刑事さんの手を煩わせてはいけないわよね。我が儘を言っ、ご迷惑をおかけしてごめんなさい」

「いいじゃないか、大丈夫だっ」

「でも、刑事さんの言う通りだと思うの」

留美は少し残念そうにしていたが、それ以上に藤田があからさまに落胆の表情を見せていた。

ここを離れるよう勧めていたはずの十無も、顔には微塵も出さなかったが、藤田同様、落胆していた。

あんなにここに残るといつていた彼女が、素直に応じたのは意外だった。やはり、恐ろしくなったのだろうか。

彼女とは住む世界が違う。これで、彼女と会うこともないだろう。俺にはきつとその方が良いのだ。また波風のない、いつもの生活に戻るだけだ。そう自分に言い聞かせてみたが、十無は何か心に引っかかり、空虚感が残った。

北山留美は昼食を済ませた後、市内のホテルへ移動した。

留美と別れ際、藤田は連絡先を聞きだしていた。ちゃっかり、東京の自宅の電話番号まで聞いていたようだった。

「これで泥棒を逃がしたら、刑事さんの面目丸潰れだな」

藤田はタクシーを見送りながら口の端で笑い、二人の刑事に嫌味を言った。

その夜、張り込み要員の私服警官が二人、増員された。それぞれ四方から、邸宅の周囲に目を光らせていた。深夜一時を過ぎた頃、皆の緊張はピークに達していた。

藤田は緊張した顔つきで何をするでもなしに、居間のソファにじつと座って時計と睨めっこし、管理人夫婦は自室で普段通り就寝していた。

丸さんは二階の部屋から外の様子を伺い、十無は金庫がある部屋のクローゼットに身を潜めて待機していた。

いよいよ、予告状された午前二時になる。厳重に警官が警備している中、いったいDはどういう手を使ってくるのか。

Dが現れれば、今夜、奴の顔を拝むことになるだろう。

藤田の話ではDは女だという。北山留美が窓の外に見た髪の長い女。そいつがDなのか？

各持ち場にいる刑事達との無線でのやり取りでも、住宅街はしんと静まり返って、人の気配はなく、異常なしのことだった。

午前一時五十九分。十無は腕時計で時間を確認した。このままDは現れないのではないか。それとも、やはりただの悪戯なのか。または真犯人がいるのか。

そんなことを考えていると、長く感じられた午前二時までの時間が、すでに二分ばかり過ぎていた。

「丸さん、変わらないですか？」

「ああ、何も起こらんねえ」

緊張感のない丸さんの穏やかな声が無線から、返ってきた。外にも確認したが変化はなかった。

悪戯なのか。十無は首をかしげ、クローゼットから出た。

予告状を真に受けた俺が馬鹿なのか。待てよ、ダイヤを確認したのは二十四日が最後だ。藤田と北山さんも一緒に見た。で、丸さんが来て俺はその場を離れ……。

北山留美！

色々と思い起こしていくうちに、十無は青ざめた。

「丸さん、大至急ここへ藤田を呼んできてくれ！」

十無は無線に向かって叫んで、二人をじっと待った。待っている間、時間が数十分に長く感じるほどに焦っていた。

「刑事さん、何かあったのか？」

丸さんと藤田は強張った顔で、走って部屋に飛び込んできた。

「藤田さん、金庫を、早く中を改めてください」

言われるままに、藤田は金庫のダイヤルを慎重に回して、重い扉を開いた。

「大丈夫だ、ダイヤは盗まれていない。なんだ、やっぱり予告状なんて誰かの悪戯だったんだ」

藤田は安堵の笑みを浮かべ、ビロードの袋を右手でぶらぶらさせた。

十無はその手から袋を取り上げて袋ごと床に落とし、ベッドサイドにあったランプを乱暴に掴んでランプの真鍮の柄でかつんと叩いた。

パリン。

碎けるような小さな音がした。

袋の中を確認するまでもなく、その音が、それはダイヤではないことを告げていた。

「おい、これは硝子玉だったのか？ 刑事さん、ここにいたんだろ？ どうして盗まれるんだよ！ あんた、ただ黙って盗まれるのを見ていたのか？」

十無の襟首を掴み、藤田は怒鳴りながら詰め寄った。

「落ち着け、誰も現れなかった」

藤田の腕を造作なしに、ぐいと捻ってよけ、十無は無表情に言った。

「すると、あのお嬢さんか」

丸さんが目を見開いて、はっとしながら口を挟んだ。

「考えたくはないが、その可能性が高い」

「まさか、そんな……」

藤田は二人の話を聞いて、ベッドによろけるように座り、呆然とした。

「二十三日にダイヤを三人で確認していた時、私は丸山が来てその

場を離れました。そのあとあなたは北山留美さんとどんなやり取りをしたのか教えてくれませんか」

「……刑事さんが部屋を出た後、俺、留美に『このダイヤは留美のものにしたいと思っている』って言ったんだ。そして、ダイヤを持っていた留美の手を上から握って、キスした。……じゃあ、俺はDと？」

藤田は狼狽している。

「まだ、そうと決まったわけではありません。可能性があるということです。彼女から聞いたホテルを教えてください。それと東京の住所も」

「わ、わかった」

藤田は住所を走り書きしたメモを十無に渡した。

うなだれている藤田をその場に残して、十無と丸さんは早速、市内中心部にあるホテルへ赤灯を回して急行した。

しかし、十無は藤田よりもショックを受けていた。

北山さんが、まさかそんなことを。それにDかもしれないとは。

何かの間違いであってほしい。

十無はひたすらそう念じていた。

早く白黒はつきりさせたい十無は気が急いでいた。

眠そうにしているフロント責任者を呼び、警察手帳を見せて協力を求めたが、そのような名前の客は利用していないという。人相も伝えたが、該当しそうな客はいないとのことだった。

「宿泊ホテルはでたらめを言っていたんですかねえ。逃げられたようですね」

丸さんは悔しそうに舌打ちをした。

二人は肩を落として車に戻った。

「後は、東京の住所を朝一で確認するしかないですね」

「多分、それも無駄かもしれんな」

「……そうですね」

藤田和輝に連絡し、張り込んでいた私服警官も帰して、二人は署

へ戻って仮眠室で仮眠をとることにした。

数時間でも眠っておかなければならないと思ったが、十無はなかなか寝付けなかった。

北山留美はDなのか。

ダイヤを盗まれたということより、留美が泥棒かもしれないという事実のほうが、十無には衝撃的だった。

間違いであつてほしい。彼女のか細い腕に、手錠をかけたくはない。彼女には無骨な手錠など、似合わない。

十無は神様に祈りたい気分だった。

翌朝、七時過ぎに――〇番通報があつた。

『ノビ』発生の知らせだった。

ノビとは、家人が寝静まったところに忍び込む、泥棒のことである。

ガイシャは、藤田建設社長宅だった。

顔を洗っていた十無と丸さんは顔を見合わせた。そして、食事も摂らずに素早く車に乗り込んで、現場へ車を走らせた。

三月末とはいえ、早朝はまだ吐息が白くなるほど冷え込む。暖気をしていない車内は、身が縮むような寒さだった。

その寒さが頭を冷やし、眠気をいっぺんに吹き飛ばしてくれた。

どうなっているのか十無にはすっかり見当がつかなくなっていた。藤田建設社長宅にノビというのは、ただの偶然なのか。ダイヤがすりかわっていたことと関係があるのか。

「……で、今朝、起きたら扉が開いたままになっていて、現金がなくなっていたんですね？」

「はい」

十無は社長宅へ到着し、すぐさま状況の聞き取りを始めた。

二十代半ばくらいの住み込みの家政婦は、まだ気が動転しているようで、十無の質問にいちいち思い出しながらゆっくりとしか話せなかった。

藤田夫妻が旅行中で不在のため、家政婦はいつもより遅い朝七時に起きていた。そして、いつものように各部屋のカーテンを開けて回り、夫妻の寝室も同様にカーテンを開けたのだが、明るくなった寝室で、金庫扉が開け放されて空になっていたのを発見して、慌てて通報したのだという。

室内はまったく荒らされた様子はなく、玄関扉は施錠されていたということだった。警備会社と契約している防犯システムは丁寧に切られていた。

十無は家の中を見まわってみたが、窓も破られた形跡はなく、玄関のピッキングが、一番有力に思われた。

しかし、鑑識が調べても、玄関扉にはピッキングの痕跡は見つからなかった。

外部からの侵入がない。これはDの仕業ではなく、もしかすると内部の人間の犯行かもしれない。だが、夫妻が留守で、一体何が盗まれたのかわからない。盗まれた物は現金だけなのか。十無は判断に迷った。

「藤田夫妻は、いつ旅行から帰宅予定ですか？」

「今日の午前十時頃と聞いています」

「今朝、この家には他に誰かいましたか」

「ええ。私の他にもう一人家政婦と、運転手がいました」

「では、その方々をここへ呼んでもらえますか？」

「わかりました」

パタパタとスリッパを鳴らし、若い家政婦は他の使用人を呼びに行った。

間もなく、体格のいい年配の家政婦が、若い家政婦に連れられてきた。

「ひよつとして、私達を疑っているんですか？ 嫌ですよ、そんなことするわけないでしょ。第一、あんな金庫の鍵が、私らに開けられるわけがないでしょう？」

十無の顔を見るなり、五十代くらいの家政婦は、何も聞かれない

うちから勢いよく話した。

「いえ、そうではありません。参考に、いくつかお訊きするだけですから」

十無は家政婦に圧倒されて、たじたじだった。この手のオバサンパワーが苦手な十無は、丸さんに助け舟を求めたが、任せたぞでも言うように、ただニヤニヤしているだけで、丸さんは全く口を挟まなかった。

十無の説明に家政婦は一応納得し、なんだか嫌だわねえと、眉を寄せながら渋々応諾した。

「ところで、お嬢さん、運転手の方はどうしたんだい？」

若い家政婦に、丸さんが言った。

「どこにもいないんです。多分、藤田さんご夫婦を空港に迎えに行つたのだと思います」

「勝手にいなくなられちゃ困るなあ」

丸さんは頭をかいいた。

仕方なく、十無と丸さんは年配の家政婦と一緒に別室へ移動し、いくつか質問することにした。

家政婦、そのだしよ園田豊子五十四才は、椅子にどすんと勢いよく座って勝手に話し始めた。

住み込み家政婦として、藤田家には十五年になるという。

そのことに触れると、夫を早くに亡くし、苦勞した云々を長々と途切れなく話し始め、十無と丸さんを閉口させた。ようやく、今朝の話しにたどり着いた時には、二十分ばかり経っていた。

園田豊子は若い家政婦より十五分か二十分ほど後に起きたのだという。

「別に寝坊したわけじゃないですよ。あの子が、カーテンと新聞は自分がやりますって言うから」

言い訳がましく、そう付け加えた。

「あの子って、もう一人の家政婦ですか？」

「まだここに来て間もないんですけれどね、そうねえ、一週間経つ

たかしらね。半人前だから、朝はしますからって」

頼に右手を当てて、本当に感心な子よねえと頷いている。

運転手のことを聞くと、無口で愛想のない人で、あの人苦手なのよねえという答えが返ってきた。

運転手は何か話しかけても頷くのみで、いつも無表情で何を考えているのかさっぱり見当がつかない青年だという。

「疑うなら、あの運転手だわ。ええ、そうですね。来た時から、何かしでかしそうな感じがして、胡散臭く思っていたのよ」

園田豊子は眉間にしわを寄せて、あからさまに嫌悪感を露わにした。

運転手は去年の暮れから雇われているという。

とにかく無愛想で、どうして雇われたのかわからないのだと、園田豊子は首をかしげた。

運転手の山本卓也^{やまもとたくや}二十八才は、園田豊子の話しだと、身長百八センチくらいで、いつも紺色の背広を身に着けているが、胸板の厚さがあり、鍛えられているように見えたという。普段、運転帽をかぶっており、髪は肩につきそうな長さで、無造作に伸ばしているとのことだった。

まだ雇われて間がない運転手。園田豊子の話を鵜呑みにするわけではないが、外部からの侵入の形跡が見当たらない現在、疑わしい人物はマークをするにこしたことはない。

十無は運転手が本当に旭川空港へ向かったのかどうか確認するため、警官を出向かせることにした。

「いや、参りましたね。あの家政婦、話し好きで」

「まったく。訊いたことの三倍は返ってきていたなあ」

丸さんと十無は顔を見合わせて苦笑した。

自室に寝ていたとう園田にはアリバイはない。だが、園田に金庫破りは無理だろう。暗証番号と鍵を手に入れていれば別だが。

次に、若い家政婦、川北美智^{かわきたみち}にももう一度話を訊くことにした。

二十五歳になる彼女は、気が弱いのか、二人の前に向かい合わせに

座ると、おどおどとして伏し目がちになった。

「私に、まだ何か……」

彼女は耳にかかる程度の短めの髪を、しきりにいじっている。縁のある眼鏡をかけているが、よく見ると、くつきりとした二重の、なかなかの美人だ。背丈も、百六十センチ後半はあるようだ。それを気にしているのか、常に背中を丸めている。

彼女は家政婦の制服と思われる、園田豊子と同じグレイのワンピースをきていたが、遥かに川北美智のほうが似合っているなど、十無はつい余計なことを比べてしまった。

十無は彼女を観察しながら質問を始め、丸さんはその横でじっと聞き役に徹した。

「以前はどちらで働いていましたか？」

「あちこち、コンビニのバイトをしていました」

「では、家政婦がここが初めてですか？」

「はい」

「園田さんは、あなたが朝のことはやるからと言ったので全て任せていたと言っていたのですが」

「いいえ、違います」

川北美智は顔を上げて頭を大きく横に振った。

「違う？」

「園田さん、新人が来ると何でも押し付けられるらしいです。これ、奥様に聞いたんですけれど。若いうちは何でも進んでやらないとだめって。あ、園田さんには絶対言わないでください。私、ここにいられなくなりますから。折角、見つけた職なので」

「わかりました」

「奥様は、私がここに早く慣れてくれたら、園田さんに暇を出すといていました。彼女、ここが長いので、色々あるみたいです」

「色々とは？」

川北美智は言い辛そうに、一呼吸おいて声を潜めた。

「……誰にも言わないでくださいね。園田さん、物をくすねるんで

す。たいした物じゃないんですけれど、野菜や調味料とか。一人息子がいて、まだ大学生らしくて、くすねた物を送っているみたいです。奥様も、多少は目を瞑っていたみたいですが、エスカレートしていて。でも、新しく入った家政婦は、大抵園田さんとうまくやっていけなくて、直ぐ辞めてしまうつて」

川北美智は澄んだ瞳を二人に向けた。

「でも、奥様が女手一つで息子さんを育てていらっしゃるからつて……園田さん、捕まったりしないですよ？」

一通り話し終えると、ペこりと軽く会釈をして、川北美智は部屋を出た。

「こりゃ、わからんな」

「ですね。園田豊子は、多少の動機ありですか」

「だが、本格的に盗みまでするかね？」

確かに、十五年働いてくすねていたものは、野菜などの食料品だけだ。ここまで大それた盗みをするだろうか。

そして、川北美智にも同様にアリバイはないのだ。

今のところ、状況からいけばホシは内部の人間という可能性のほうが有力だ。だが、本当にDは絡んでいないと言いきれるだろうか。「別宅に来た、予告状、あの犯行予告の日付と同じ日に盗みがあったのは、偶然でしょうか」

「なんとも言えんねえ」

丸さんも唸っている。

「ただ、言えることは、誰にもアリバイがないってことだな」

丸さんは、額の端を手で掻きながら言った。

確かにそうだ。今の段階で絞り込むのは無理だ。満遍なく目を光らせておく必要がある。

「プロの仕事には間違いない。三人の身元を洗ったら何か出てくるかもしれんな」

「三人？」

「そりゃ、北山留美、山本卓也、川北美智だろう？ 皆、最近藤田

家にかかわりを持つようになってる」

「川北美智も？」

「疑わしいものは全て調べておいたほうがいいからねえ」

「まあ、そうですね」

川北美智まで、調べる必要があるのだろうか、十無は多少疑問に思ったが、ベテランの丸さんに従い、そう返事をしておいた。

突然、丸さんの携帯電話が鳴った。

「――何！」

温和な丸さんが、意外にも厳しい口調で思わず叫び、顔色が変わった。

運転手のことだろうか。十無はじつとやり取りを伺った。

「……山本卓也は、空港にはいなかった。藤田夫妻はこれからタクシーで自宅へ戻るようだよ」

携帯電話を背広の内ポケットにしまいながら、丸さんはため息をついた。

「逃げた？ 山本がホシなのか？」

「その可能性が強くなったな。乗っていた車があるかどうか、念のため確認してもらうことにしたよ」

続けて、丸さんは署にも連絡を取り、近郊の高速道路でも、ナンバー確認に当たらせてほしいと手配を要請した。

山本がホシだとしたら、単独犯だろうか。それとも、Dとのかかわりがあるのか。北山留美がいなくなったのは？ 暗中模索する中、十無の気持ちは焦るばかりで、苛立ちが膨れ上がっていた。

「トム、電話ついでに確認したんだが、あのお嬢さんの自宅は実在したよ」

十無が考えていることを見透かしたように、丸さんが付け足した。「北山留美ですか？ じゃあ、Dとは関係ないかもしれませんが」「身元がはつきりしたただだから、なんともいえんがなあ」

十無は、北山留美を容疑者からはずしたい思いが先走り、ついそんなことを言ったのだが、丸さんは十無のそんな気持치가わかった

のか、苦笑いしながら頭をくしゃつと掻いた。

十無はそれに気づいて少し恥ずかしくなり、真面目な顔をしてさつさと話題を逸らした。

「今は、山本卓也の足取りを追うしかないですね。彼のアパートへ行きましょうか」

「そうだな」

藤田邸に刑事と制服警官を数人残し、夫妻が帰宅するまでの間に山本卓也のアパートを訪ねることにした。

彼のアパートは、藤田家から車で五分とかからない所にあった。

そこは、よくある二階建てのアパートで、住所ではその一階に山本と表札があるはずだった。

が、玄関横の窓に空き部屋の看板が出ていた。

「既に、引き払っていますね」

十無は隣の部屋のチャイムを鳴らした。

「はい……」

眠そうな顔をした、大学生らしき男が面倒臭そうに顔を出した。

「警察のものです、隣の山本卓也さんについてお訊きしたいのですが」

「隣？ もういないよ」

「いつ引越しされましたか？」

「さあ……俺もしょうちゅう友達のところへ泊まってるから」

「そうですか。何か覚えていることがあったら教えてほしいのですが」

「つつても、話したこともないし。……あ、一度、女が来てたことがあったな。それが、背が高くてモデルみたいな美人だったから、よく覚えてるよ」

「いつ頃ですか？」

「一、二週間前だったかな」

「何か特徴は？」

「髪が長くて、ミニのタイトスカートの、派手で水商売風だったな。」

足がいい感じで……」

その男はそれ以上のことは何も知らず、他にはこれといった収穫はなかった。

「山本を訪ねてきた女は、Dかもしれませんね」

「そういうこともありうるねえ。……背の高い女か。そういや、あの川北という家政婦も背が高かったなあ。でも、まさかねえ。犯行後もそこに残るような、そんな大胆なことをするかねえ」

「でも、直ぐいなくなるより怪しまれないということも……」

そう口にしてみると不安が急激に広がってきた。十無は無言で携帯電話を取り出し、藤田邸へかけた。

「……買い物に出掛けた？ え？ それはどこ？ いや、だから、待てないんです。急いで、直ぐに会いたいですよ！」

「でも、こちらに来て待っていた方が……入れ違いになるかもしれないし。もう帰ってくると思いますけれどねえ」

園田という家政婦が電話に出たのだが、のらりくらりと、要領を得ない返事が返ってきて、十無は苛立った。

「……環状線沿いの？ ……わかった、ありがとう！」

ようやく聞き出した店名を告げると、丸さんはハンドルを乱暴に切って左折し、アクセルを踏み込んで車を店へ走らせた。

川北美智はスーパーにはいなかった。

ほぼ、いないだろうと十無は思っていた。途中で署にも連絡し、川北美智が運転していた車を報告して先に手配もしていたのだったが、スーパーに着いて彼女がいないのを確認した十無は、気づくのが遅かった自分に腹を立て、悔しさが込み上げてきた。

「くそっ！」

飛行機で飛ぶか、JRか。それとも車を乗り換えて逃走したか。

まだ、何処かに潜み、市内から出ていない可能性もある。

気がつくのがもっと早ければ……。悔やんでも悔やみきれない。あんな大人しそうな女がDだったとは。化けるものだな。女は怖い。

十無はつくづくそう思った。

そして、十無の頭の中では北山留美が容疑者から外れたのだった。

「仕方ない、我々は藤田邸へ戻って、彼女の部屋を検分するとしてよ
う。何か、手掛かりがつかめるかもしれん」

「はい」

丸さんの慰めるような言葉に、十無は笑顔で答えたので、丸さんは不思議そうに首をかしげていた。

7・逃走と誘惑

川北美智の居室は、案の定、もぬけの殻だった。手掛かりになりそうな目ぼしい物は何ひとつ残っていなかったのだ。

まんまとやられた。かなり以前から狙っていたのだろうか。用意周到に計画されている。状況からいって、あの家政婦と運転手はグルだったと考えるべきだろう。

「こりゃあ、俺たちの手におえないホシかもしれんな」
丸さんがため息をついた。

本庁が出張つてくることになるのか。それだけは避けたい。このヤマは何とか自分達で片をつけたい。

Dを目前にして、それも取り逃がした状態で、他の奴にこの件を引き渡したくない。

十無は気ばかりが急いていた。

二人は川北美智の部屋を出て、重い足取りで廊下を歩いた。

十無の携帯電話が鳴った。

「十無か？ 若い女から連絡があつた。どうしても直接話したいことがあるといっていたぞ。何処かで女を引っ掛けたのか？」

電話は刑事課課長である、叔父の東俊介からだつた。十無が何と答えていいのかと絶句していると、課長は話しを続けた。

「まあ、それは冗談だが。北山留美という女性が、大至急連絡がほしいとのことだ。今回の事件に関係があるのか？」

「ええ、まあ」

またもや、十無は無意識に言葉を濁してしまった。叔父から彼女の携帯電話の番号を聞き、その場で電話を掛けた。

丸さんもじつと十無を見守っている。

十無は自分でも、鼓動が高鳴るのがわかつた。また彼女の声が聞ける。そう思うだけで気持ちが高揚した。

「刑事さん？」

待ち構えていたのか、呼び出し音が二度も鳴らないうちに、彼女の声が聞こえてきた。

「北山さん、何処にいたんですか？」

「和輝さんがしつこいから、ホテルはだたれを教えたの。心配をかけさせてしまったかしら。ごめんなさい」

そういうことだったのか。十無は彼女が逃げたわけではないとわかり、ほっとしたと同時に顔が思わずほころんでしまった。

藤田和輝のしつこさから逃れたかった。そう彼女は言ったのだ。

藤田和輝に好意を寄せているわけではなかったのだ。

「……さん？ 刑事さん？」

「あ、すいません。考えごとをしてしまっ」

「私、あのダイヤのことで、ちょっと引っ掛かっているんです」

「あなたがいなくなっ」た後、ダイヤは偽物だと気がつきました。あなたは疑われていたんですよ？」

「違います！ あのダイヤは私が見た時から偽物でした」

「なんだって？」

「私、宝石は少し詳しいんですけど、あれは間違いなく偽物でした。でも、和輝さんの気分を害してはいけないと思って、あの場では何も言えなかったの。ごめんなさい。早くお知らせした方がよかったんでしょけれど……」

留美は言葉を濁した。

北山留美の言葉を真に受けて良いのだろうか。行方をくらましている家政婦の川北美智がDだとしたら、北山留美は本当にシロなのか。わざわざ連絡をしてきた理由は何か。

十無は私情を挟まないように、冷静に判断しようと勤めた。

「何故、今頃そんなことを言うんですか？ 藤田さんが寝入ってしまった時でも言えたじゃないですか」

「あの、それは……」

「このままでは、あなたも参考人として事情聴取しなければなりま

せん」

「……だって、刑事さん……十無さんと会えなくなるでしょう？」
「――」

十無の頭は真っ白になった。

北山留美が言ったことを理解するのに、一分程度かかった。頭の中で、彼女の言葉が壊れたテープの様にリピートしている。

『十無さんと会えなくなるでしょう？』

「おい、トム、どうした？」

微動だにせず、携帯電話を耳に当てたまま固まっている十無に、丸さんが心配顔で声をかけ、十無はやっと我に返った。

「と、とにかく、居場所を教えてください」

「私から行きます。藤田さんの自宅でもいいのかしら？」

「いえ。じゃあ、東署へ来てください。私から連絡しておきますから、そこで担当の者に話してください」

「……私、十無さんにお話したい」

「それは……」

十無は嬉しいと同時にかなり困惑していた。

こんな状態で彼女にあつたら冷静さに欠けてしまい、自分はまともに仕事ができないのではないか。北山留美と会ってはいけない。

そんな判断をしている一方で、会って彼女と話したい、側にいたいという強い欲求がこみ上げてぶつかり合っていた。

「だめ、ですよ。私、知っていることを黙っていたんですもの。

刑事さんにご迷惑ばかりかけて。嫌われても当然ですよ」

「いや、そうではありません」

「じゃあ、会ってください？」

北山留美の声のトーンが上がった。

嬉しそうな彼女の声に、思わず十無は「わかりました」と返事をしていた。

「……北山留美がここへ来ます」

電話を内ポケットにしまいながら、十無は丸さんと目を合わさず

にそう言つて、電話でのやり取りを伝えた。勿論、十無に会いたいという彼女の言葉は伏せて。

十無はじつと自分を観察しているような丸さんの視線を感じた。

その視線は、まだ隠していることがあるのではないかと言いたげだった。

「しかし、連絡してくるといふのは奇妙だな。まあ、何にしても、協力しにわざわざ出向いて来るんだから、クロではないかも知れないなあ。だが、シロとも言い切れない、グレーゾーンだ。北山留美は注意しておいた方がいい。くれぐれも」

「……」

そんなことはわかっていふと、十無は言いたかったが、あなたの考えていることは全てお見通しだよと、言わんばかりの丸さんの忠告に、言葉を返せなかった。

そうこうしているうちに、藤田夫妻が帰宅してきた。

「そんな、まさかあの娘が……」

「ああ、奥様。気をしっかり」

藤田夫人は若い家政婦が行方をくらましたと聞き、顔色を失い、居間のソファにくず折れるように座り込んだ。家政婦の園田が、その傍らで夫人の肩に手を置き、慰めの言葉をしきりにかけている。藤田氏は、そんな夫人を横目に、真っ先に寝室の金庫前へ走った。そして、金庫が空だということを確認すると、信じられないというように、目を丸くして額に玉の汗をかき、動揺を隠せないでいた。「ばかな、どうしてここへ……別荘のダイヤは狙わなかったのか？」藤田さん、息子さんがダイヤをこっそり持ち出していることを知っていたんですか？ それに、狙われることを知っていたような口振りですね」

後についてきた十無が背後から声をかけたのだが、藤田氏は飛び上がらんばかりに驚いた。

「せ、倅はしょっちゅうあれを持ち出してしまうんでね。困った奴です」

「高価なダイヤだと聞いていますが、無用心ではありませんか？」

「うむ……」

藤田氏は押し黙ってしまった。

「実は、別荘にあったダイヤを拝見しましたが、硝子玉でした」

十無はわざと、予告状のことには触れずに言った。

藤田氏の汗が、一層、吹き出たように見えた。

「それは、倅が無くしては大変だから……」

やはり、藤田氏は初めからダイヤは偽物だと知っていたのだ。だが、それだけのことであれば、こんなに動揺はしないだろう。

「Dという泥棒をご存知ですね？」

「いや、知らん」

即座に否定したが、藤田氏は瞬く間に青ざめた。

知っていたのは一目瞭然だった。とすれば、後は考えられるのはこれしかない。十無は藤田氏に鎌を掛けてみた。

「藤田さん、Dに目をつけられるように、わざと息子さんがダイヤのことを言いふらすように仕向けましたね？」

「いや、そんなことは……」

「ダイヤに多額の保険金をかけていませんか？」

「……」

藤田氏はうなだれたまま、否定しなかった。恐らく、偽物をDに盗ませて保険金をせしめる魂胆だったのだろう。

「これは立派な保険金詐欺です。今回は他の物が盗まれ、本当に被害者となってしまったので目を瞑りますが、もうこんな危険な真似はしないでください。いいですね？ それに、息子さんにも早くそのことを伝えてください。泥棒に入られて偽物にすり替えられたと思ひ込み、気を落としています」

そんな十無の忠告が耳に入ったのかどうか、藤田氏は相変わらず青ざめている。

「ところで、この金庫には何が入っていましたか？」

「五千……五十万円の現金です」

「五千万円ですね？」

「とんでもない！ 五十万です！」

藤田氏は大きく首を左右に振り、力強く否定した。

今回もまた、脱税の金か……。

十無は部屋の入り口に立ってことの成り行きを見守っていた丸さんに、顔を向けて苦笑し、小さくため息をついた。

「藤田さん、もう一つ確認したいことが。ダイヤは無事ですか？」

藤田氏は十無の言葉にはっとして、顔を上げた。

「直ぐに確認してください！」

青ざめた顔を一層青くして、藤田氏は寝室を飛び出し、隣の書斎へ走った。

藤田氏は書棚の一角にある本を四、五冊まとめて取り出し、その奥に姿を現した、隠し金庫を開けた。

「ああ、大丈夫だ！」

ダイヤが無事だとわかると、ようやく、藤田氏の顔に笑みが戻った。

「ほう、これは、うまくしたものだ。本の後ろに隠し金庫とは」

丸さんが感嘆の声を上げた。

「小さい金庫でしょう？ このダイヤのためにしつらえたんです」

ほっとしたのか、藤田氏はこのよくできている金庫を自慢げに十無と丸さんに見せてくれた。

「あのお、刑事さん、北山留美さんという方が、お見えになりました。それと、奥様は他のお部屋で休んでいてよろしいですか？」

開け放しのままの書斎に、家政婦の園田が顔を出した。

「今行きます。居間に通してもらえますか。奥さんは休んでいて構いませんよ」

十無はそう返事をし、藤田氏にここで待っているよう伝えて軽く会釈をして、丸さんと共に居間へ行った。

家政婦の園田豊子が北山留美に紅茶を出し、軽く会釈をして下がるどころだった。

北山留美は大きなソファに埋まるように座り、部屋を見回していた。藤田邸は中央に豪勢なシャンデリアが吊るされ、幅広の階段がその横に大きく陣取り、曲線を描いて二階へと繋がっている。

調度品や家具、壁も木目調ではなく、白い塗り壁だったが、藤田夫妻はこのつくりがよほど気に入っているのか、別荘とほぼ同じくりだった。

北山留美も、それに気づいて見回していたのだろうか。豪勢なシャンデリアをじっと見つめている。

「あ、十無さん。ご迷惑をおかけして本当にごめんなさい」

十無の姿を見るなり北山留美は慌てて立ち上がり、深々と頭を下げた。

「北山さん、もういいですから頭を上げてください」

そして十無は一緒に居間へ来た丸さんをちらりと見て、「すいませんが、私のことは東と呼んでいただけますか？」と、苦笑しながら小声で付け加えた。

やはり、必要以上に親しいと思われては差し障りがある。

「あら、ごめんなさい」

北山留美は両手を口に添えて頬を染めた。

そんな仕草にも十無は愛らしさを感じ、微笑んでしまいそうになったのだが、丸さんの目もありポーカーフェイスを通した。

十無は北山留美と向かい合わせに座ったのだが、丸さんは北山留美が座っているソファの背後に立ち、彼女を観察しているようだった。

「あの……今、家政婦さんから聞いたのですけれど、ここに泥棒が入ったって本当ですか？」

心なしか、十無は彼女の瞳がきらきらしているように感じた。また、推理小説かぶれの好奇心がうずきだしたのだろうか。

「昨夜のことです……」

「ええっ！　じゃあ、Dという泥棒ですか？」

「それはなんと……あと、北山さん、やはりダイヤは初めから偽

物でした」

「まあ、やつぱり。これで私の疑いは晴れたのかしら」

「はい……」

十無は今のところはと、言いかけて止めた。彼女の背後にいる丸さんが、余計なことは言わないと目で合図していた。

「良かった」

そう言つて、素直な笑顔を見せた北山留美に、十無はまだ疑いをかけなければならないのかと思うと、少し胸が痛んだ。

「ダイヤが偽物だと見抜くとは、随分、宝石に詳しいんですね」

彼女の背後から丸さんが声をかけると、北山留美はびっくりとして、

「ええ」と、ぎこちなく頷いた。

「母と一緒によく宝石店へ行くものですから」

「ほう、それで目が肥えているんですか。ところで、お嬢さんは目白にお住まいですか。あの辺はいいですねえ、閑静な佇まいで。トム、あんたも東京だろう？」

「そ、そうですね……」

彼女に探りを入れるように、丸さんがいきなり十無に振ってきたのだが、それ以上言葉にならなかった。

北山留美の自宅は存在し、偽名ではないことも確認済みだ。丸さんは、他に何を確認しようとしているのだろうか。

「お嬢さんの自宅も大きいのでしょうか」

「いえ、そんなには……」

「お父さんは何をしている人でしたかな？」

「貿易会社です。でも、私、会社のことはよく知りません。父はあまり仕事のことは話さないのです」

矢継ぎ早に質問する丸さんに、北山留美は少し困惑し、美しい顔を曇らせた。

「いやいや、すいません。お嬢さんのような方とお会いする機会がないもので、ちょっと興味がありません」

「いえ、いいんです」

後ろにいる丸さんに向かって、僅かに笑みを返した彼女の態度が、十無には怯えているようにも見えた。

「あの……東刑事さん、どうしてダイヤは偽物だったんですか？」

「息子さんが持ち出すことを藤田氏が予想していたようです。で、本物は別の所に……」

「またもや、丸さんが口到人差し指を当てて、十無にそれ以上は話すなと合図した。」

「……守秘義務ですね」

「はい……」

十無が言う前に、北山留美が悪戯っぽく肩をすくめて笑って言った。

「私、ここに泊まっています。何かお役に立てることがあれば、いつでも呼んでください」

十無は彼女からメモを受け取ったのだが、そのメモを見て動揺した。

そこにはホテルの電話番号や住所の代わりに、『今夜十時に、駅前ホテルPのバーで待っています』と、記されていたのだった。

「東刑事さん、お願いしますね」

十無が何も言えずにいると、北山留美が意味ありげにじっと見つめて念を押した。

「はい……」

十無は気の抜けたような返事をした。

「刑事の俺ではなく、俺個人に会いたいということか。俺なんかと？」

呆然としたままになった十無の頭には、仕事中だという意識はすっかり消え去っていた。

「じゃあ、私はこれで失礼します」

彼女が立ち上って帰ろうとしたのだが、丸さんがそれを制した。

「一ついいですかね、お嬢さん。Dという泥棒のこと、どう思います？」

「どうって……女の泥棒だと聞きましたけれど、やっぱり怖いです」
「いえね、今回の事件はDと名乗る泥棒の仕業ではとあたりを入れていましてね。ただ、こちらとしては身近に共犯者もいると踏んでいるんですがね。どう思いますか。あなた、推理小説がお好きですか」

「はあ、小説は好きですけど、実際の事件について意見を言うなんて、とても素人の私には……」

丸さんは北山留美の表情を注意深く窺っていたが、彼女は戸惑っているものの、『身近に共犯者』と聞いても、顔色一つ変えなかった。

「そうですか。あなたの家も狙われるような立派なお宅なようだから、Dの噂を耳にしたことはありませんか？」

「いいえ、知りませんでした」

「お引き止めてすいませんねえ」

丸さんは穏やかな笑顔を浮かべ、玄関先まで北山留美を送った。

「どうも、引つかかるなあ」

「何がですか。父親の職業も合っていたじゃないですか」

「だが、そんなことは調べておけばわかることだ」

「じゃあ、彼女は北山留美に成りすましている、別の誰かだとも言うんですか？　だとしても何のために？　ダイヤを狙ってですか？　堂々と我々の前に現れてしまったら、ダイヤを盗むなんてことは不可能でしょう。そんな危険を冒してまで盗みますか。現金を盗んだ時点で一緒に逃げるはずですよ」

「それはなんとも言えんが、信用するには何か……」

「勘ですか？」

「まあ、そんなところだなあ」

明らかに容疑者と断定できる二人が、現在逃亡中なのに、北山留美を疑う理由があるのか。

共犯の可能性があるのではと、疑うことをやめない丸さんに、十無は少し苛立った。

「そんなに言うなら、彼女の自宅から写真を手に入れますか？」

「ああ、それがいいかもしれん」

十無は勢いで言ってしまったのだが、丸さんがすんなり同意したので、写真を取り寄せる羽目になってしまった。

面倒な仕事を一つ増やしてしまったと十無は思ったが、そんなことは苦に感じないほど気持ちは高揚していた。

北山留美と今夜二人で会う！

仕事一筋に打ち込んできた十無だったが、北山留美と出会って何かが変化していた。

色恋などにかまけていたら、ろくな目に遭わない。そんなことに時間を費やすのであれば、事件の一つでも解決できるよう、仕事に精を出していた方が充実した毎日を送れる。

十無は学生時代の苦い経験から、今までずっとそう考えていたはずなのだが、その考えが見事にひっくり返っていた。

いくら自分で否定しても、北山留美を目で追い、彼女の仕草や行動がいちいち気にかかるのだ。

説明し難い、こんな気持ちは初めてだった。愛しい人。十無は今まで、単にそう考える人に出逢っていないだけだったのだ。

そして、気持ちが浮ついた十無は重大な見落としをしていた。

北山留美には藤田邸に泥棒が入ったことを知らせていない筈なのに、十無が藤田邸にいることを何故知っていたのか。

恋に目覚めた東十無は、普段の冷静さを失い、そのことを疑問にすら思わなかったのだ。

その日の夜、もう三月も終わろうとしているのに、夜風は身を切るような冷たさだった。それどころか、雪も積もるほどに降りしきり、本当に春が来るのかと心配になるような空模様だった。

氷点下五度。タクシーを降りると、街角の電光掲示板の気温表示が目についた。気温を知ると一層寒く感じられ、東十無はコートの襟元を閉め直して肩をすぼめて歩いた。

一旦雪が解けた車道は、がたがたのまま凍り、道行く車はのろりと進んでいる。

平日の夜、寒さのせいもあってか、街の中心部は繁華街へ飲みに繰り出す人も少なく、閑散としていた。

約束の時間、夜十時を回ろうとしていた。

十無は旭川駅前にあるホテルへ向かっていたのだが、ホテル前にタクシーをつけず、わざわざ道路二本分ほど手前で降りたのには理由があった。

丸さんが俺の後をつけている。

タクシーの背後にいる、一台の車が十無の視界に入ったのだ。間違いなく丸さんの車だ。俺は信用されていないのか。

十無は丸さんの考えを確認したかった。

人通りが少なく影になるものもない、道幅の広い買い物公園を歩くと、一人での尾行は厳しい。ましてや、知った顔の人間をつけるのは容易ではない。

少し離れて、十無の背後を歩いていた丸さんが、観念して声をかけてきた。

「トム、わかつているんだろう？ 降参だ」

「丸さん、人が悪いですよ」

十無が振り返ると、丸さんが走りよって来た。

「いや、すまん、すまん。だが、あんたのことが心配だったんだ。北山留美と会っただろう？」

「……はい」

「あのお嬢さんは、危険だ」

「どういうことです？」

「トムは女に免疫がなさそうだからな。手玉に取られるぞ」

「まるで、女を知り尽くしているような口ぶりですね」

丸さんの口から意外な言葉を聞き、十無は茶化すように言った。

「仕事でいろんな女と接してきたが、北山留美は作り物だ。あれは、あの女の本当の姿ではない」

「どうしてそう思うんですか？ 何か怪しいですか」

「彼女の行動は、全て計算しつくされているように見える。そこにトム、あんたが引っかった」

「え？」

意味が分からず、十無は聞き返した。

「言いづらいたが……北山留美は、最初から、トム、あんたを丸め込もうと計画して近づいてきたんじゃないかい？」

「……そんなことをして彼女に何のメリットがあるというのですか？ まさか……彼女が何か企んで俺に近づいてきたというのか。」

十無は丸さんの忠告を素直に聞く気にはなれなかった。

あんな清楚で大人しそうな女性が、そんなことをするものか。

「百歩譲って、丸さんの言うように彼女が良からぬことを企んでいたとしても、俺は大丈夫です」

「まあ、そうだな。大丈夫だと思うが、気をつけることだ。事件関係者と、特別な関係になることは避けた方がいい。これ以上の口出しはしないよ。じゃあ」

丸さんはそう言って、十無の肩を軽く叩き、路駐している自分の車へ、小走りに去っていった。

彼女に会えばはつきりすることだ。万が一、事件への関与があるのであれば、躊躇なく彼女を逮捕するまでだ。

自分でも、グレーゾーンの彼女に私的なかわりを持つことに対していくらか不安を感じていたのだが、丸さんに指摘され、水を差された十無は、意地になって逆に開き直ってしまった。

俺は私情で仕事をおろそかにはしない。

十無は自分に言い聞かせるように、頭の中で何度か呟いた。

そんなことをわざわざ反芻するのは、裏を返せば自信がないというこの現われなのだが、十無にはその自覚はなかった。

北山留美はホテル最上階のバーで、ブルーの液体で満たされているカクテルグラスを指先で弄びながら、ぼんやりと夜景を眺めている。

た。

「すいません、待たせましたね」

「もう来ないかと思いました」

声をかけると北山留美は首を傾け、目を細めて微笑んだ。

シヨットバーには他に客はいなかった。一面硝子張りのため、カウンター席の一番端に座っていた彼女は、夜景をバックに一枚の絵のようだった。

服装のせいだろうか、今までの彼女とは何処か違う印象を受けた。

黒い布地の裾が足首まであるワンピースは、しつとりと体に吸い付くように体の線を強調し、肌が露わになっている部分はないのだが、妙に艶めかしい。漆黒の長い髪に真紅の口紅が、学生とは思えない、成熟した女を感じさせた。

そして、ハイネックの襟元には、プチダイヤのついたネックレスが美しく輝き、豊満な胸を引き立てていた。

「このネックレス、可愛いでしょ？ 母からのプレゼントなの」

「え、ああそうですか」

つい、胸元に視線がいつていたことに、十無は赤面した。

「大学生にもなって、アクセサリーが親からのプレゼントだなんて、ちよつと寂しい女よね」

それに気づかないのか、北山留美は続けてそう言い、屈託なく笑った。

十無は彼女の隣の席に着き、ビールを頼んだ。

「あら、バーに来てビール？」

「あまり詳しくないので……いけませんか？」

「いいえ、でもたまに違うものもいいでしょう？ 次は私が選んでもいいかしら」

「お願いします。あの、北山さん、何故あんなメモを私に……」

「留美でいいです」

「……留美さん、何故」

「いけませんか？」

留美は十無の言葉を強い口調で遮り、熱を帯びた視線を十無に注いだ。

「いや、そうではないのですが」

いくら鈍感な男でも、その瞳が何を意味しているのかがわかるくらい、留美はあからさまにじつと十無を見つめた。

とうとう十無は、どうしたら良いのかわからなくなり、その視線から顔を背けて、苦し紛れにビールを一気に飲んでしまった。

丸さんの言うとおり、俺は今夜ここに来ない方が良かったのではないか。自信がなくなってきた。留美さんといると、何もかも、どうでもいいように思えてしまいそうだ。たとえ、彼女が犯罪に加担していたとしても。

北山留美には不思議な魅力があった。守ってあげたくなるような、はかない印象かと思えば、事件に首を突っ込む好奇心旺盛な一面もある。そして、今夜の妖艶で積極的な彼女。

十無が黙ったまま、空のグラスを握り締めていると、いつの間にか彼女の注文したカクテルが、二人の間に置かれた。

それは、蘭の花が挿され、パイナップルとチェリーが飾られた、鮮やかな赤いトロピカルカクテルだった。グラスの端にストローが二本立っている。

「ご一緒していい？」

「は、はい」

十無が頷くと、留美はストローに手を添えて、口をつけた。

「美味しい。十無も飲んでみて」

いつの間にか、十無と呼び捨てになっている。

言われるままに、十無もストローを口にした。留美も顔を寄せて一緒に飲んだ。

留美の顔が直ぐ間近にあった。色白の顔に伏せた瞳の、黒く長い睫毛が美しい。

十無はカクテルの味どころではなかった。

ストローに口をつけたまま、留美は伏せていた瞳を十無へ向けた。

お互いの鼻先がつきそうな位置から、十無を見つめる瞳。視線を逸らすにも逸らせず、留美の瞳に釘付けになった。

彼女を思ふあまり、冷静な判断力を損なうのではないか。そんな、自分の気持ちが恐ろしい。

十無は蛇に睨まれた鼠の心境だった。

彼女の瞳から逃げ出したいが逃げられない。好意を抱いている女性に見つめられて、そんな気持ちになるのはおかしい話だが、今の十無にはびつたりの表現だった。

「私、ここのホテルに泊まっているの」

留美がそのままの姿勢で囁いた。

「そうですか」

「十無、私の言った意味、わかる？」

「意味、ですか？」

そう口にしてから、十無は自分でその答えをみいだして赤面し、

正面の夜景に目を逸らした。

これは俺を誘っているのか。

夜景に重なって、ランプシェードに照らされた自分の姿が、窓ガラスに映って見えた。

肩に力が入り、ぎこちなく背筋を伸ばして座る男が、こちらを向いている。

俺はどうしてこうも女性が苦手なんだろうと、十無は自分のことが情けなくなった。

「……私のこと、嫌い？」

「い、いえ」

この場から逃げ出したい。

それが十無の正直な気持ちだった。

彼女をうまくリードできないもどかしさ。このまま彼女の言うように、部屋へ同行してしまいたい気持ちと、距離を置いて接するべきだと思ふ気持ちが、十無の中でうまく処理できずに混沌としていた。

そうこうしていると、四、五十代くらいの宿泊客らしい男三人が、賑やかに話しながら、少し離れた席に着いた。

時折、同じフロアにあるカラオケボックスから、騒がしい歌が漏れ聞こえてきた。

「静かにお話したいわ。ね、お部屋でゆっくり飲みましょう」

十無は返事こそしなかったが、留美が席を立つと一緒に席を立った。会計を済ませた時点でイエスと言ったも同然だった。

エレベーターに並んで乗り、ドアが閉まってから留美がそっと十無の腕に手を絡ませて頭をもたれかけてきた。

頭がくらくらしたが、お酒に酔ったせいではなかった。十無は背中にじつとりと汗が流れていた。

エレベーターを降りても、留美はそのまま腕を組んで歩いた。十無には廊下がいやに長く感じられた。

留美が部屋の前で鍵をバックから取り出す間も、十無はまだ迷っていた。

女性が一人で泊まっている部屋に、このまま足を踏み入れていいのか？ 本当にいいのか？ 被疑者の可能性もまだ捨て切れていないのに。

「どうぞ」

「……」

ドアを開けられても、十無はその場に立ったまま、部屋へ足を踏み入れようとしなかった。

「十無？」

「いや、やはり帰ります。本当は事件関係者と個人的に会ってはいけないんです」

「……まだ、私のこと疑っているのね」

「いいえ、決してそんなことはありません」

「いいんです。仕方のないことです。でも、私……十無のことが好きになってしまったの。迷惑かもしれないけれど」

「迷惑なんてことはありません。でも、今は……」

「じゃあ、一つだけお願いを聞いてくださる？」

「何ですか？」

「キス、して」

そう言っただけ留美は眼を閉じた。

自分が少なからず好意を寄せている女性が、目の前でキスを待っている。

十無は今まで経験したことのない状況に戸惑い、熱病にかかったようなもうろうとした状態になっていた。

キス、して。

彼女のその一言に、魔法をかけられたかのように突き動かされ、ぎこちなく留美の両肩に手をかけたまではいいが、十無の動きはそこで止まった。

「十無……」

留美が目を開け、不安そうに十無の顔を覗き込んで首をかしげた。

「すいません、俺……」

十無は赤面しながら、肩に置いていた手をゆっくりと下ろし、俯いた。

やはり、中途半端なことはいできない。

「十無」

留美は俯いている十無の頬に、そっと左手を添えた。

留美の左手と自分の肌が触れ合った。留美の手の体温が、心地よく頬を伝ってくる。

十無は眩暈を覚えた。だが、それは嫌な感覚ではない。雲の上を歩くような、足が地に付いていない感覚。

留美は十無を見て優しく微笑んだ。十無はされるがまま、動けない。

留美の顔がごく自然に近づき、十無は瞳を閉じた。彼女を直ぐ側で感じる。

唇に柔らかな感触。

胸の奥が火をつけたように熱くなる。

長い時間、唇を重ねていたように感じたが、実際にはほんの数秒の出来事だった。

「私のこと、嫌いにならないで」

キスの後、顔を隠すように、留美は十無の胸に顔を埋めた。

「嫌いになんかなっていません。俺、留美さんが潔白だということを明らかにします。そして……」

そして、あなたにきちんとお付き合いを申し込みたい。十無はそう言葉を続けようとしたが、段々と声が小さくなり、言葉にならなかった。

「ありがとう、待っているわ」

十無の言わんとしていることを汲み取ったように、留美が顔を上げて嬉しそうに微笑んだ。

十無はホテルを後にして、冷え込んだ青白い夜の街を歩いた。タクシーを拾って帰宅することはできたのだが、高揚して熱く火照っている体には、冷たい風が心地よく感じられ、歩きたい気分にした。

恋愛など面倒なだけだ。そう思っていた自分が嘘のようだった。留美さんのことを思うだけで力がみなぎる。彼女のためであれば、寝食いとわず、奔走しても苦にならないだろう。

彼女への嫌疑をなんとか晴らしてあげたい。

そのためには、丸さんの進言通り、東京の北山留美の自宅から写真を手に入れて、本人であると証明しなければならぬ。

既に手配してあるから、明日にでもそれは確認できるだろう。身元がはつきりし、Dとの繋がりが皆無であれば、潔白は証明できる。

十無は心の底で、北山留美が容疑者一味ではという一抹の不安を抱えていたものの、彼女に対する思いのほうがり、警察の専売特許疑うということ放棄してしまっていた。

今の十無には雪が所々に残る寒々としたもの悲しい雪景色も、綿菓子に散りばめられた美しい光景に映っていた。

十無が仕事以外で、こんなにも気持ちを傾けて情熱を注いだのは、

初めてのことだった。

それ故に、この後に十無が受けた衝撃と落胆は尋常ではなかった。

5・ダイヤとハートの盗難

東十無が甘い夜を過ごしている頃、藤田家に再び賊が忍び込み、ダイヤが盗まれたのだった。

『予告状を出したからには、今度こそ本物のダイヤを頂いていきます・D』

ご丁寧に、書斎の机上にカードが残されていたのだ。

東十無と丸さんは翌朝七時に通報を受けてそれを知ったのだった。

二人は早速藤田邸に出向いた。

藤田夫人はこの二日間、寝込んでいた。藤田氏はまさか昨日の今日でまた被害に遭うとは思ってもいなかったのだろう。ただただ呆然とし、居間のソファに座って頭を抱えていた。

「藤田夫妻が毎晩寝る前に、自家製の梅酒を飲むことを知っていたのは、園田さんの他にはあの若い家政婦、川北美智と運転手の山本卓也だけですな？」

丸さんは、うなだれている藤田氏の後ろに立っている園田豊子に念を押すように確認した。

「ええ、そうです。ああ恐ろしい。あの娘、いいえDという泥棒でしたっけ？ そのDが姿を消す前に、お酒に睡眠薬を入れていったんですよ、きつと。私？ 私もね、ちょっとお相伴にあずかってね、ほんの少しですよ……コップ一杯……そしたら、なんだか眠くなってそのまま寝ちゃったのよ。ああ、怖い」

Dの出現で、園田豊子は前回にも増して興奮し、身振りも交えて機関銃のように話した。

川北美智は、園田がこっそり梅酒を拝借していることも知っていたのだろう。計算づくで酒に薬を仕込んでいったようだ。

俺が留美さんと時間を過ごしている間に！

東十無は藤田家の警備を人任せにしたことを後悔し、自分を責めた。しかし、直ぐ側に潜んでいて、盗めなかった物を翌日に再び盗みに

来るとは、大胆不敵、警察を舐めている。

「こりゃあ、プライドの高い泥棒だねえ」

書斎に移動し、白い手袋をはめてDのカードを手に取り、苦笑いしながら丸さんが言った。

書斎にはまだ鑑識がうろつろしている。

残されていたカードは、別荘に届いていた葉書き大のカードより小さくて白い名刺大の紙で、紙質が薄かった。ワープロ打ちされた文面が小さく印字されている。今回は、『D』と明記されていた。室内を荒らした形跡はなく、明らかにダイヤだけを狙ったの犯行。今回も玄関からの侵入と考えられたが、またもやピッキングの形跡はなかった。

「合鍵をこっそり作って持っていたのかもしれないわねえ」

園田豊子が言った通り、確かにそう考えるのが妥当だろう。藤田邸には、家政婦の園田豊子と藤田夫妻しかいなかったのだから。

これで、Dを逮捕するまたとない機会を逃してしまったのかもしれない。

傍から見ても気落ちしているのがはつきりとわかるほど、十無は肩を落としていた。

「トム、まだ諦めるには早い。あのお嬢さんが何か鍵を握っているかもしれないから」

「まだ疑っているんですか？」

「当たり前だ。不審なところが僅かでもあれば、疑うのが俺達の仕事だろう？ トム、頭を冷やせ。あんたは優秀な刑事だと課長から聞いている。今のトムはいつものあんたじゃないだろう？ 私情を挟んでいる」

丸さんに真面目な顔で面と向かってそう言われた十無は、少し恥ずかしくなった。

確かに俺は知らず知らずのうちに、彼女の不審なところから目をそむけていたかもしれない。だが、クロと決まったわけではない。彼女が北山留美であると証明できさえすれば。

十無はまだ信じていたかったのだった。

「俺を買いかぶらないでください。そんなに優秀ではないですから丸さんの問いかけに肩をすくめて、十無は話をすり替えた。」

「丸さん、初めのノビでは、Dはダイヤのありかがわからなかったで、一端は諦めた。だが、昨夜までの間に何らかの形でダイヤのありかを知って犯行に及んだ。あの短時間にどうやって？ あの手隠し金庫を知っているのは藤田夫妻の他に、俺と丸さん、途中で顔を出した園田豊子」

「いや、それともう一人、北山留美。あのお嬢さんがここへ来ていた」

「だが、彼女は居間にいたはずですよ」

「しかし、こっそりと除き見たかもしれん」

「それは不可能です。俺たちの他にまだ警官がうろろしていたし、彼女が来たと聞いてから一、二分も経たないうちに俺と丸さんは居間へ行っただけですから」

「じゃあ、園田豊子がDと連絡を取ったというのかい」

「可能性として否定できません」

自信たっぷりに十無が言い切ったその時、十無の携帯電話が鳴った。

「十無か？ 北山留美の写真が届いたぞ。写真では、お前が言っていた特徴とほぼ一致していた」

「そうですか」

叔父である東俊介刑事課課長の電話に、十無はほっと肩をなでおろした。

「だが母親が言うには、旅行に行く前日、娘は美容室に行ってパーマをかけたらしい。それに、携帯電話に連絡を取ってもらったのだが、北山留美は今、帯広にいて言っていたそうさ。その旭川にいる北山留美から目を離すな。Dと接触する可能性がある」

なんだって！ では、旭川にいる『北山留美』は、一体誰なんだ。彼女の全てが嘘だったのか。俺は騙されていたのか。

十無は心の奥底に押さえ込んでいた疑念で頭が一杯になり、目の前が真っ白になった。

電話を耳に当ててじっとしている十無に、「おい、どうした？」と、丸さんが心配そうに声をかけた。

「丸さん！ 北山留美を参考人として引つ張りましょう。彼女は北山留美を騙る別の人物だ。急がないと、行方をくまますかもしれない」

一瞬、失意に身を硬くした十無だったが、直ぐ我に返り、刑事の顔に戻った。

「それなら大丈夫だ。十無には悪いが、すでに北山留美のいるホテルには張り込みをつけている」

「そうでしたか……」

「黙っていてすまんなあ」

「いえ、いいんです。俺が甘かったということですよ」

丸さんは北山留美を張り込んでいる刑事に電話し、彼女が動いていないことを確認した。

「よし、あのお嬢さんはまだホテルにいる。ここは他の奴に任せて、ホテルへ向かおう」

十無と丸さんは、車を飛ばしてホテルへ急行した。

到着までの十分間、二人は無言だった。丸さんは十無の心中を察し、気を使っているようだった。

生まれて初めて好きになった女性が、犯罪者だったなんて洒落にもならない。それもDの共犯者。いや、待て。Dという可能性もある。そうだとしたら最悪だ。自分が追っていたホシだったなんて。十無は丸さんに聞こえないように小さくため息をつき、窓を全開にして顔一面に朝の冷たい風を受けた。

青空が広がっていたが、気温は三度。寒さで頬がひりひりした。

だが、今の十無にはそれがほど良い刺激に感じた。

何処かに強い刺激がないと、自分を責めて立てる言葉を次々と列挙してしまいそうだった。浅はかな自分。柄にも無い恋に心躍らせ

てしまった自分。

窓を開けている車内は、震えるほどの寒さだったが、丸さんは窓を閉めろとも言わず、黙って十無のしたいようにさせてくれた。

彼女を好きになってしまったことを後悔する傍ら、北山留美が別人だということを受け入れられず、十無は何かの間違いであってほしいと心の奥で願っていた。そんな自分が嫌だった。だが、自分の感情をそう簡単に切り替えられないのだ。

十無は北山留美に対する自分の気持ちを、ただただ否定して押し殺すしかなかったのだが、そうすればするほど、逆に熱いものが胸に込み上げてきた。

十無自身が思っているより遙かに、この厄介な恋愛感情は心の奥深くに根ざしてしまっただのだ。

十無は暴走した恋愛感情をコントロールできず、もてあましていた。

「北山留美がいない？」

「はい、チェックアウトいたしました」

十無が食ってかかるようにフロントに身を乗り出して聞き返し、ホテルマンは困ったように眉をひそめて言った。

「おい、どういうことだ？ お前、ちゃんと張り込んでいたんだろっ？」

丸さんも表情を固くして、側に立っている若い刑事を睨みつけた。「しかし、昨夜から交代で張り込んでいましたが、聞いていた特徴と一致する若い女は一人も通りませんでした。間違いありません……」

「チェックアウトはいつしましたか？」

若い刑事が自信たっぷりに話しているのを遮り、十無はホテルマンに向き直って質問した。

「今朝の四時頃です。JRに乗るご予定だと言っていました」

「四時？ Dのアジトは多分東京にある。彼女は東京へ移動するはずだ。新千歳から東京へ向かおうとしているのか！ 丸さん、ここから新千歳までどのくらい時間がかかる？」

「だいたい、ＪＲで二時間くらいか」

ＪＲ旭川駅はここから目と鼻の先だ。四時過ぎのＪＲに乗ったとして、六時過ぎには新千歳空港だ。新千歳空港発、東京行きの始発は七時代があつたはず。それに搭乗したのか？　もう八時半を過ぎている。後は羽田で捕まえるしかない。

十無は頭の中で素早く計算し、その場で叔父、東俊介刑事課課長へ電話を入れた。

東俊介刑事課課長は、早速、東京の所轄署に連絡し、近くにいる警官を動員してもらおうよう協力要請を申し入れる手配をするのとこのだった。

今、彼女を逃すと、Ｄとの接点がなくなる。それに、なによりも彼女の真意を会って直接聞きたい。

十無は自分ではなす術がなく、もどかしかった。

「何とか間に合えばいいが」

「新千歳発は七時五十分で、到着は九時二十分の予定です。ＡＮＡと日本航空が同時刻です」

若い刑事が失態を挽回したいのか、携帯電話で飛行機の発着時間を検索して教えてくれた。

「そうか、なんとか間に合う。後は連絡を待つしかない」

十無はふうとため息をつき、ようやく肩をなでおろした。

「でも、昨夜からいつときも目を離さないように交代で張っていたのに。午前四時頃だったら、人気がないからすぐわかるはずです。

その時間には、男が出て行ったただけだったんですが。本当に四時ですか？」

若い刑事は納得がいけないという口振りで、ホテルマンに確認した。

「あのお、チェックアウトはお連れ様がしましたが」

「連れ？　一人で泊まっていたんじゃないのか！」

無意識に十無の声が大きくなった。

「若い男性と泊まっておいででした」

「じゃあ、四時に見た男がそうだったのか」

若い刑事が口を挟んだ。

男と泊まっていた！ 留美さんは、やはり初めから俺を騙していたのか。

十無は頭に血が上っていくのを感じた。

男と泊まっていたという一言で、僅かばかりの望みも絶たれ、奈落の底に落とされた十無は怒りの感情を露わにした。

「それはどんな男でしたか！」

十無がホテルマンに向かって言った言葉尻は、辛うじて丁寧だったが、声が荒くなっていた。

「肩くらいまでの長髪で、身長は百六十センチくらいだったと思います。歳は十代後半くらいでしょうか。顔はサングラスをしていたので、なんとも……」

ホテルマンは十無の苛立った口調に驚き、おどおどと答えた。

「外は薄暗いのに、サングラスをかけていたから、俺もその男のこととは覚えていません。グレーのハーフコートを着ていました」

無表情だが明らかに怒りを抑えているように見える十無に、若い刑事も恐る恐る答えた。

普段大人しく、滅多なことでは怒らないように見える十無が、怒りに任せて声を荒げている。

丸さんも、そんな十無を目の当たりにし、目を丸くして驚いていた。普段の十無であれば、人目を気にするところだが、そんなことは今の十無にはどうでもよくなっていた。

北山留美が若い男とホテルに泊まっていた。その事実が許せなかった。

あの夜の出来事は全て偽りだった。俺を騙していた。多分、俺を藤田邸から遠ざけるために、全てはダイヤを盗むという目的のため、仕掛けられたお芝居だったのだ。

とにかく今は、男との二人連れだと伝えておかなければ。

「あのお、刑事さん、その女性のことで少々引つかることがござ

います」

十無が叔父にもう一度連絡しようと、携帯電話を取り出していると、ホテルマンがおずおずと声をかけた。

「何ですか？」

「実は、そのお客様はいつも二人一緒にはいらっしやいませんでした。いつもどちらかお一人でお見かけしまして……」

「どうのことです？」

「いつも、いつホテルに戻られたかわからないのです。女の方が戻られたと思ったら、次の日、男の方をお見かけするといった具合で、チェックアウトも、男の方のみでしたので、お連れ様は？ と尋ねましたら、先に出了たとおっしゃって……素人の言うことですから、聞き流してくださって結構ですが、背格好も同じくらいで、もしかしたら、お客様は一人だったのでは、と」

あくまでもこれは推測でしかないのですがと、そのホテルマンは付け足した。

女性が男のなりをしたところで、所詮、それは男の服を来た女に見えるのが落ちだ。余程、訓練しなければ男に見えることはないだろう。

ホテルマンの話だと、その若い男は、女性には見えなかったという。

張り込みをしていた若い刑事達も、女には見えなかったと、首をかしげた。

やはり二人だったのか？ それにしてはホテルマンが言うように、不自然な点が多い。では、北山留美が男装していたのか？ そうだとしたら、完璧に男に成りすましていた彼女は、一体何者なんだ。

十無に次々と疑問が浮かび上がってくる。

とりあえず、叔父には二人の特徴を話し、どちらか一人の可能性もあると電話で伝えておいた。

「丸さん、今は待つしかない。藤田邸に一旦戻りましょう」

「そうするか」

「刑事さん！ もう一つ忘れていました！」

ロビーを出かかった十無に、ホテルマンが走り寄ってきた。

「これを渡すようにとお預かりしていました」

十無は振り返って封筒を受け取った。

それは、部屋に備え付けられているホテルの名前入り封筒だった。

封を開けずに、背広のうちポケットに封筒をねじ込み、軽く会釈をしてそのままホテルを後にした。

車に乗り込み、一呼吸おいて、十無は封筒を内ポケットから取り出した。

「トム、なんて書いてあるんだ？」

便箋を開いて手にし、じっとしている十無を見かねて、丸さんが声をかけた。

「……俺と過ごして楽しかった、というようなことが書いてあるだけでした」

「ふざけた女だ！」

「そうですね……」

十無は便箋を握り締めて上の空で返事をした。

便箋に走り書きのように書き綴ってある彼女の文章が、十無は気にかかった。

『十無へ。女性としてあなたと過ごせたこの数日間、とても楽しかった。十無は真面目な刑事だね。でもあんまり融通が利かないと彼女できないよ。商売柄、何処かで会うことがあるかもしれないけれど、その時はお手柔らかに』

商売柄って……。やはり泥棒なのか。それに、女性として？ まるで自分が男だともいうような……。でも、まさか。抱き締めた時のあの細い肩は。あの柔らかい唇の感触は。俺を散々振り回しておいて、このまま俺の前から姿を消すのか。君は一体何者なんだ！ 十無は何が何でも、もう一度彼女に会いたかった。会って確かめたかった。あの夜のことは全て偽りだったのか、と。

しかし、同時に会うのが怖いとも思っていた。もし、万が一、彼

女が男だったら。どうしたらいい？

皮肉たつぷりの小馬鹿にしたような文面だったのだが、十無には皮肉が通じなかった。

十無は窃盗犯を追う刑事という前に、恋する男として彼女を追いかけていた。

北山留美を騙る彼女は、藤田邸のダイヤと共に消えたのだが、同時に東十無のハートをも盗まれたのだった。

結局、羽田空港では彼女を見つけ出せなかった。『同伴』の若い男も現れなかったと、午前十一時過ぎに東署に連絡が入った。

搭乗名簿には、当然のことだが、『北山留美』の名は無かった。

仮に二人が同一人物であるとしたら、変装の得意な人物ということになる。そうであれば、どこかで再び変装したという可能性もある。藤田邸からは手掛かりとなるようなものは一つも出てこなかった。

目撃者もない。

念のため、園田豊子の居室も調べられたが、ダイヤは出てこなかった。

事件発生から三日が過ぎようとしていたが、何の進展もなく、捜査は暗礁に乗り上げた。

取り逃がしてしまった。これで、Dにも彼女にも会うことはないだろう。

手土産なしで東京に帰らなければならない。いや、手土産どころか新たな事件まで背負い込んで、未解決のまま帰らなければならないのか。

Dについて分かったことといえば、複数犯、三人グループの可能性があり、そのうち二人、または一人が女ということと、Dの靴のサイズくらいか。しかし、足跡も彼女が仕組んだことで、事実とは違うかもしれない。

「トム、気落ちするんじゃないよ。Dという泥棒を確認できたんだ。後はじっくりと追い詰めるだけだ」

「はい……」

「……それにな、女なんてごまんといるんだ。あんた、見栄えがいんだから、黙っていてもそのうちいい女ができるさ」

東署内の自動販売機の前で、丸さんは缶珈琲#26833を二つ買い、廊下脇の椅子に座っている十無にその一つを渡して隣に腰掛けた。

丸さんなりに心配してくれているのだろう。そのぶつきら棒な慰めの言葉に、十無は少し気持ちが暖かくなって微笑んだ。

「後のことは俺達に任せろ。何か新しいことがわかったら連絡するから」

「はい……」

Dを見失ってしまった今、十無はすっかりしない状態で東京に帰らなければならなかった。

「もう旭川を発つのかい？」

「ええ、課長に挨拶してから行こうと思います」

「そうか……なあ、しつこいようだが女に気をつけるよ。あんた、純粹そうだから、ころつと悪い女に引っかかりそうで心配なんだ。女つてのは魔物だからなあ」

丸さんは立ちあがり、缶珈琲#26833をくいつと空けて真顔で言った。

「余計な心配をかけさせてすいません。今回の件で散々だったので、当分、女性には懲り懲りです」

十無はおどけて肩をすくめた。

「トム、あんたは免疫がなさ過ぎる。気を悪くしないで聞いてくれよ。あんたみたいな純粹培養のお坊ちゃん、署長あたりにいいとこのお嬢さんでも紹介してもらった方が身のためだ」

十無は違いますと、反論したかったが、年上の丸さんを立てて、肯定も否定もせず、苦笑いを口の端に浮かべて黙って聞いていた。

「……年寄りの戯言だがな。じゃあ、気をつけて帰りなよ」

丸さんは背中を向け、右手を上げてひらひらとさせながら、ゆっ

くりと刑事部屋に戻って行った。

ずけずけと勝手なことを言って行ったなと十無は思ったが、丸さんが言うのと嫌味がなく、つい素直に聞いてしまう。

「でも、俺ってそんなに、見ていて危なっかしいかな」

十無は不本意にも箱入り娘、もとい箱入り息子のように丸さんに言われ、不満そうに呟いた。

旭川に来てこの一週間、目まぐるしく色々な出来事が起こった。

Dの予告状、謎の美女、北山留美。行方をくらました川北美智と山本卓也。盗まれた現金、ダイヤ。

そのどれもが不消化で問題は山積していた。

旭川での手掛かりや目撃情報の収集は丸さんに任せるしかないが、東京で俺は、Dの尻尾をつかむことができるのだろうか。何の手掛かりもなく探しても、海に落としたコインを探すようなものだ。

十無は自然とため息が出た。

三月下旬、十無は後ろ髪を惹かれる思いで、春の気配を感じ始めた雪解けの街、旭川を空路、後にした。

午後六時過ぎ、日がかげつてきていたが、離陸して間もなく、飛行機の窓から見たのは、なだらかな丘陵地帯の田園風景に広がる、白と黒のまだら模様だった。

黒いところは雪解けを早めるための、融雪剤を散布した部分らしい。

青々とした夏の風景も良いが、これもまた絵になり美しい。

今度は仕事ではなく、観光で来たいものだと思つた。

座席は三分の一ほどの空席があり、隣には客がいなかったので、

十無は隣の座席に脱いだコートを置いてゆったりと座った。

午後八時前には羽田に着く予定だ。約一時間四十分の空の旅。うとうとしている間に到着するだろう。

十無はこの一週間の緊張していた糸が切れたように、急激に睡魔に襲われた。

シートの背もたれを後ろに目一杯倒し、一分も経たないうちに深

い眠りについた。

「……さん、刑事さん」

夢うつつの中で、十無は誰かに呼びかけられ、横になったまま重い瞼を開けた。

「刑事さん」

十無は状況が理解できなかった。十無の傍らに座っているのは、北山留美だった。

「きみ……留美さん？」

十無は飛び起きた。

そんな馬鹿な。ここに北山留美がいるはずがないじゃないか。俺はまだ夢を見ているのか。

その『彼女』は笑みを浮かべて、こちらを見ている。

朝一番の飛行機で、東京へ逃亡したのではなかったのか。

「いや、北山留美ではない。君は……何者だ」

少し冷静さを取り戻した十無は、刑事の顔で冷ややかに言った。
「私だつて驚いているんだ。だって、同じ飛行機に刑事さんが乗っているから」

名前は名乗らず、につこり微笑んでその『彼女』は言った。

偶然会った友達にでも話しかけるような口振りだ。警察から追われているという意識がないのか。どういうことだ。

よく見ると、その『彼女』は、見た目は北山留美だが、雰囲気が違う。悪戯っ子のように目を細めて笑う『彼女』は、今までの北山留美とは別人だった。

漆黒のロングヘアはそのままに、服装はスラックスにトレンチコートを羽織り、さながら男装の麗人といったところだ。

おしとやかなお嬢様ではなく、仕草がまるで少年のようだった。粗雑な言葉使いに、アルトの声。

じっと黙って動かずにいれば、初めて会った時の、守ってあげたくなるような深窓のお嬢様、北山留美なのだが。

この『彼女』の変容ぶりに、十無は驚きを隠せなかった。

「で、事件は解決したの？」

「解決したのかって、きみ……」

「ああ、まだなんだ、やっぱり」

「当たり前だ！ 何を考えているんだ」

こんな蓮っ葉な奴に振り回されていたのかと思うと、十無は段々腹が立ってきた。

「おい、羽田に着いたら、このまま署に同行してもらうぞ」

十無はそう言って凄み、『彼女』の腕を掴んだ。

「痛いなあ、離してよ。ちょっと待って、どうしてそうなるの」

「お前、自分の立場がわかってるのか？」

「どういうこと？」

「窃盗容疑がある。参考人として来てもらう」

「ええっ、どうして？」

「お前に、Dではないかという疑いがある」

「Dって、あの女怪盗の？ それはありえない。だって、私は男だから」

その『彼女』……彼はさらりと言ったのだが、十無はそれを聞き流せなかった。

「男なのか！」

ああ、俺は男相手に交際を申し込もうとしていたのか。それに、俺はこいつとキスまでしてしまったのだ。最悪だ！

「どうしたの？」

赤くなったり青くなったりしている十無に、彼は不思議そうに顔を覗き込んだ。

「涼しい顔をして、散々人をこけにして！ 北山留美も一緒に泊まっていた男も、お前だな？」

「こけにしているつもりはないけれど」

「じゃあ、趣味で女装をしていたとでも言うのか？」

「そっ、私には女装の趣味がある」

彼は不敵な笑みを浮かべた。

「おまえ、Dの仲間なのか？ 俺をかく乱させるためにこんなことをしたのか？」

「Dのことは知らない、会ったこともないし。噂は聞いているけれど」

「大体、どうして堂々と俺の前に現れるんだ！」

「だって友達を見かけたら、普通、声をかけるでしょ？」

彼は悪びれず、そう言った。

「俺はお前の友達でもなんでもない！ おまえ、いったい誰なんだ！」

「ああ、ごめん。私はアリア、宜しくね、刑事さん」

「ありあ？」

「そう」

「苗字は？」

「いいじゃない、そんなこと」

「よくない、これは本名じゃないな？」

「私のこと女だと思ったのなら謝るけれど、だからって犯罪者扱いしないでよ」

「あくまでもしらを切るのか。まあいい、署でじっくり話を聞かせてもらうからな」

「警察なんて行かないよ。何もしていないのに」

「しらばっくれるな！ ダイヤを狙うために、藤田和輝に近づいてダイヤのありかを探っていたんだろう？ まず別荘にダイヤがあるのか予告状で確認した。そして、偽物だとわかり、藤田邸にダイヤがあることをDに連絡して伝えて家政婦に扮していたDが盗みを働いた。だが、肝心のダイヤだけは別の場所にある盗めなかった。それで警戒を緩めるために、俺を飲みに誘ったんだろう？」

「違う」

「何が違うというのだ！」

「……刑事さん、取引しない？」

「俺は、犯罪者と取引なんかしない」

「犯人を捕まえたいでしょ？」

「当たり前だ。だからこうしてお前を連行するんだ」

「だから、犯人はDじゃないって」

「他に真犯人がいるというのか？」

「そういうこと」

「話してみる、聞くだけ聞いてやる」

「私のことをこれ以上詮索しないで、不問にしてくれたら教えてあげる」

自信たっぷりにはアリアと名乗るその男が言った。十無が絶対この話に乗ってくると、確信しているような態度だ。

しかし、聞きだしてから約束を破ったからといって、文句を言われる筋合いはない。何も問題はないだろう。

「よし、いいだろう。本当に真犯人はいるのか？」

「うん……園田豊子が犯人」

「あの家政婦が？」

「ダイヤはね。現金は違う誰かだけれど」

「それはDだな？」

「豊田園子はDの騒動に、便乗したんだと思う。藤田邸で、彼女がお茶を持ってきた時、寝る前に飲んだ梅酒が、睡眠薬入りだったって彼女から聞いたんだけど、藤田夫妻が毎日習慣で飲んでいたりしても、Dがそんな不確かな方法をとると思えない。だって、泥棒が入ってごたごたした日の翌日の夜だよ？ 誰かが勧めないと飲まないで寝てしまうこともある。確実に飲ますことができたのは、家政婦である彼女だけだ。藤田豊子のかかりつけの病院に問い合わせ、眠剤服用の有無を確認したほうがいい」

「だけど、ダイヤは何処に隠した？ 隅々まで探したが、彼女の部屋からは見つからなかった」

「そうだね、私だったら、シャンデリアにひょいと引っ掛けて隠すかな」

「え？」

「藤田邸の居間にも、豪華なクリスタルのシャンデリアがあったでしょ。刑事さん、ヒチコックの映画知らない？ 『ファミリープロット』。きつと藤田豊子も、同じ手を使ったんだと思う」

なるほど。目の前にあって誰も気に留めない場所。ダイヤを隠すにはもってこいかもしれない。

でも、こんな得体の知れない奴の話当真に受けるのか。

十無が黙っていると、北山留美の顔をしたアリアは話を続けた。

「カードがあったでしょう？ 別荘に届いたものと同じだった？」

アリアに指摘され、あつと思つた。

カードは大きさも紙質も違つていて、藤田邸にあった方には『D』と印字されていた。

鑑識でそれぞれのカードを詳しく調べたところ、使用しているインクは違つていた。指紋の検出はできず、ワープロ打ちされた文字の形は、どちらも標準的なもので同じ字体ということだったため、あまり問題にしまつたのだ。

「Dつて、書いてあつた？」

「……藤田邸のカードには書いてあつた」

「それは、Dだということを強調するために書いたんじゃないかな。Dは自分からは名乗らない。『D』というのは、ダイヤをよく狙う彼女に対して、被害者の間で勝手につけられた通り名だから」

「そうか」

「旭川の東署へ早く連絡した方がいいと思う。と言っても、羽田に着くまでは無理だね」

アリアは意地悪くにやにやしている。

「今の話が仮に本当だとしても、現金のほうはDの仕業だろう？ だとしたらお前も共犯だ。やはり同行してもらおう」

「あーっ、最初から約束を破るつもりだった？ そういうことをするなら、こつちにも考えがある」

「何をする気だ」

「警察へ連れて行くなら、刑事さんが私を押し倒したって話すから」

「そんな嘘、誰も信じるものか。それにお前、男だってさつき言っただろう？」

「ふーん、刑事さんだって女だと思ったんでしょ？ 別に男だと言ってもかまわないけれどね。男なのに押し倒されたって言うから。東十無刑事、容疑者の女装した男を脅し、みだらな行為を強要。なんて、格好の三面記事だね。あのホテルのバーテンダーも、私達がいたのを、きつと覚えているね」

「脅す気か？」

「刑事さんが約束を破ろうとするから」

「わかった、わかったよ」

あることないこと、何を言われるかわかったもんじゃない。記事にならないまでも、署内で好奇の目にさらされそうだ。

十無は仕方なく折れた。

「おい、その格好、どうにかならないのか。紛らわしい」

「あれ？ まだ、私のことが女に見える？」

「って、そのまんまじゃないか！ と、言いたいところを、またからかわれそうなので、十無は言うのを堪えた。

「……おまえ、本当に男か？」

「女だと思っなら、女でいてあげるわよ」

アリアは十無ににじり寄り、肩に腕を回して、北山留美の高いトーンで甘く囁いた。

アリアの顔が十無の目の前、二十センチと離れないところに迫ってきていた。

しかし、その顔は清楚なお嬢様の表情ではなかった。まるで、獲物を狙う猫科の動物、女豹のような鋭い光を宿している瞳。

「私が女かどうか、知りたい？ じゃあ、東京に着いたら試してみる？」

くると目まぐるしく変容するアリアの態度に、十無は思考が追いつかない。

十無は数秒間、硬直していたが、飛行機の揺れが我に返らせてく

れた。

「な、何を……からかうな！」

赤面しながらも、十無は辛うじてアリアを払いのけた。

「ふふん、なんだつまらない」

アリアは十無から離れて隣の座席に座り直し、ころつと態度を変えた。両腕を思いつきり振り上げて伸びをしながら、アリアは子供が拗ねるような表情を見せた。

投げやりな態度。大人びたことを言つてのける一方で、あどけない横顔。ちぐはぐな印象。

もしかしたら、未成年なのか。

だとしたら、幼さが残る気まぐれで突飛な行動も納得できる。時折見せる挑発的な態度も、一生懸命、背伸びをしているのではないか。

「……自分を粗末にはいけない」

思わず、十無はそんな言葉が口をついて出てしまった。

一瞬、困ったような、悲しいような複雑な表情をしたアリアだが、次の瞬間には、からからと笑い飛ばしていた。

「あははっ、何を言い出すかと思ったら、今時、補導員でもそんな臭いこと言わないね」

「おまえを見ていると、自暴自棄になつていのように感じる。悪い仲間がいるのであれば、早く手を切れ」

「ふん、大きなお世話だ」

「きつと、家族が心配しているぞ」

「刑事さん、笑わせてくれるね。私の家族……義兄は今の状態をよく理解しているよ。それどころか、どんどん『仕事』を回してくれる。今回の『仕事』だって、義兄が……」

アリアが途中で口をつぐんだ。

「酷い兄貴だな。弟を犯罪に巻き込んでいるのか」

「……別に、酷くない。義兄は私を大事にしてくれている。義兄は、大切な人。あの人の為だったら、私は何でもする」

十無を見つめるアリアの瞳に、鈍く暗い陰りが見えた気がした。華奢な体に異常なほどみなぎる決意。彼にそこまで言わせ、こんなにも彼を悲しそうな表情にさせる義兄とは、何者なのか。

二人にはそんなに深く強い絆があるのか。

十無はその会ったこともない『義兄』に、嫉妬のようなものを感じていた。

自分ではそうと自覚がないまま。

「ああ、刑事さんが変なことを聞くから、つい余計なことを話しちゃった。刑事さん、話を引き出すのがうまいね。あ、それが仕事か」アリアはまた、おどけた態度に一変した。

十無にはそれが、傷口を無理に隠そうとしているように思え、痛々しく感じた。

彼は今の生活から脱したいと、救いを求めているのではないか。

「おい、アリアとか言ったな。お前の人生は誰かのためにあるんじゃない。お前のためにあるんだぞ」

「刑事さん、またお説教？」

「はぐらかすな」

十無は顔をそらそうとするアリアの両腕を掴んだ。

「やっぱり、細い腕。本当に少年？ 女性ではないのか。」

十無は俯いた彼の顔を見つめた。

化粧をしたきめ細かな白い顔。紅潮している頬。つけ睫毛なのか、長い睫毛が瞳を覆っている。黙っていれば何処をどうとっても、女性なのだが。

「刑事さん、腕、痛い」

「ご、ごめん」

「ほら、もう羽田に着く」

十無の肩越しに窓の外を覗き見ながら、アリアが話を逸らした。暗い窓の外、地上には空をも照らし出すほどの、人工の明かりがまばゆい光を放っていた。

「空には星が見えないけれど、地上には沢山の星があるみたい」

アリアは遠い目をして呟いた。

アリアの横顔が寂しそうだった。

守ってあげたい。

十無は思わず、そんな衝動に駆られた。

彼はその華奢な体で、虚勢をはって生きてきたのだろうか。犯罪に誘う悪い仲間にもまれ、片意地張って生きてきたのか。

素直な表情を隠し、大人をけん制して誰にも頼らずに。

警察官として、青少年を更生させたいという単なる責務を超えた感情。これは同情なのか。それとも……。

ぼうつとしている十無を、アリアが不思議そうに見ていた。

「刑事さん、座席ベルトしたほうがいいんじゃないの」

「え？ ああ……」

いかん。俺は何を考えている。どうしたというのだ。外見に惑わされるな。彼は男だ。いや、それ以前に被疑者だ。彼の更生は、俺が心配するより少年係に任せればいいのだ。

間もなく、飛行機は着陸態勢に入り、ゴオツという音と共に着地し、ゆっくりとブレーキがかかった。

機内の乗客は、早々に荷物を手元に置き始め、降りる用意を始めた。

「刑事さんの荷物はこの鞆だけ？」

「そうだ。おまえは？」

「送ったから、何もなし」

「どこへ？」

「自宅だけど」

「住所は？」

「内緒。それより、早く旭川に電話したら」

「言われなくてもするから、余計な心配をするな。お前にはまだ訊きたいことが山ほどある、逃げるなよ」

「しつこいなあ」

アリアは大袈裟なため息をついた。

十無はタラップを降りながら、携帯電話で旭川東署の叔父に連絡を取って事情を伝えた。

「課長に頼んだから、後のことは大丈夫だろう。さて、次はお前だ」
「捜査協力者に向かつて、そういう口の利き方はないと思うけれど」
「お前の疑いが晴れたわけではない」

「融通が利かないなあ」

空港の建物までバスで移動する間も、十無はがっちりとアリアの側についていた。

アリアも観念したかのように、大人しく並んで歩いていたのだが、店が並ぶ、人ごみの中を歩いていた時、アリアが突然走りだした。

「おいっ！ 止まれ！」

そう叫んでも止まるはずもなく、十無も慌てて追いかけた。

電車の改札口を通っているのを見つけ、十無も乗車券を買おうと販売機に駆け寄りながら、財布を入れていた懷に手をつつこんだ。

「ない！」

懷にあるはずの財布がなかった。

「まさか、あいつ！」

そう、十無が寝ている間にアリアが掏り取っていたのだ。

「くそっ、やられた」

アリアを乗せた電車は、十無の目の前を悠々と走り去ったのだった。

6・焦がれる気持ち

調子が狂いつぱなしだ。狂うなんてものじゃない、これは。俺じゃないようだ。

この俺が、こそ泥に財布を掏り取られるとは。

東十無は財布を掏り取られたことを知った時点で、大きなショックを受けて戦意を失ってしまったのだ。

無理をすれば、駅員を振り払って改札口を跳び越すこともできたはずだった。

いや、財布を盗まれたことが理由ではない。俺は何故そうしなかった。あいつといると、いつもの自分ではなくなる気がして怖くなったのではないか。とんでもないことをしでかしそうで、俺はあいつから逃げ出し、仕事を放棄してしまったのではないか。何をやっている。私情を挟むな。次に見つけたら必ず捕まえる。

十無は自問し、自らを叱咤した。

今まで生真面目に仕事をこなしてきた十無にとって、これは一大事だった。

タクシーに乗ってから、旭川東署の叔父から連絡があったのだが、何を話したのかさっぱり頭に入らず、何度か聞き返してしまうほど、十無は上の空になっていた。

お陰で叔父に叱責された。

「十無、しっかり聞け、お前らしくないぞ。どうかしたのか？」

「すいません、大丈夫です」

「園田豊子はほぼ容疑を認めた。部屋から、予告状と同じ材質の紙も見つかった。だが、ダイヤが見つからんだ。園田もシャンデリアに隠していたと自供したのだが」

「そうですか……」

「また何かわかったら連絡する。十無も頑張れ」

話し終えた頃に、アパートの前に着いた。

「運転手さん、部屋にお金を取りに行くので、待っていてくれますか？」

「あんだ、そんなこといつて踏み倒すんじゃないだろうね？」

運転手は十無を睨んだ。

「そんなことをするわけがないだろう？ 俺は刑事だ！」

十無は警察手帳を提示しながら、タクシー運転手相手に八つ当たりし、つい語彙を荒げてしまった。

運転手は文句を言いたそうにしていたが、十無はタクシーを降りた。

夜風が生ぬるい。旭川ではまだコートがいるというのに。

双子の弟、昇が帰宅しているのだろう。アパートの部屋には明かりがついていた。

「ただいま」

「兄貴、お帰り。遅かったな」

昇は居間に寝転がって、こちらに顔も向けずにテレビに向かって言った。

「昇、お金をかしてくれないか」

「へ？」

昇は、ようやくこちらを向き、自分と同じ顔をきよんとさせた。

「いいから早く。タクシーを待たせているんだ」

「……わかったよ。ちゃんと返してくれよ」

十無は昇から一万円札を受け取り、運転手に支払ってきた。

よつぽど、交番で電車代を借りようかと思ったが、さすがにプライドが許さなかった。

電車で帰れたら、こんな余計な出費はなかったのにと、十無は玄関ドアを閉めながら、ため息をついた。

「旭川でそんなに金を使ったのか？」

「ん、まあな」

まさか、掘り取られたとは口が裂けても言えない。十無は言葉を濁した。

「ふん」

昇は納得していないような返事をした。こういう時、昇は勘がいい。双子だからなお更わかるのだろうか。

十無はコートをしまつて荷物を片付けながら、何か訊かれるかときどきしていた。今訊かれたら、動揺してでまかせもうまく言えない気がしたのだ。

「飯食つたのか？」

「なんとなく、な」

十無はたいしたものは口にしていなかったが、喉を通りそうもなかった。

こんな日は、ビールでも飲んでさっさと寝てしまおうと、冷蔵庫を覗いたが、丁度切らしていた。

「悪い、ビール飲んじやつた」

「昇、ちゃんと買つておけ！」

昇は相変わらずテレビの方を向いたまま、謝った。

「おい、いい加減にしろ！」

「兄貴？ 何を苛々しているんだ」

「どうもしない！ お前がちゃんと謝らないから」

自分でも、子供じみたことで怒っているとわかつていたが、どうにも収まらなかった。

わけがわからないとでも言うように、首をかしげ、昇は体を起こして胡坐をかいだ。

「兄貴、何かあつた？」

「別に！ 俺はもう寝る」

「まだ、十時だぜ？」

昇が呆れたようにそう言ったが、十無は空腹を牛乳で紛らわせてから自室にこもり、ふて寝した。

だが、興奮冷め遣らず、妙に目が冴えてその夜はなかなか寝付けなかった。

そして、翌朝、十無は寝坊したのだった。

「兄貴、何処か具合でも悪いんじゃないのか？」

昇は本気で心配しているようだ。

「大丈夫だ。昨日はどうかしていた、すまなかった」

探偵業の昇は出勤時間が不規則だ。今朝は遅い日だったらしい。

十無は起こさなくても必ず時間に起きているので、普段、昇は十無を起こすことはない。

髭を剃って顔を洗い、歯磨きを手早く済ませて牛乳を一気に飲み、ネクタイを片手にベルトを締めて、五分で用意を済ませ、十無は玄関へ走った。

そして、昇が玄関先で新聞を郵便受けから取り出している横を、走りぬけようとしたのだが、

「あ、兄貴の財布がこんなところに？」

と、昇が言ったので、十無は心臓が飛び出そうなほど驚いて立ち止まった。

「これ、兄貴の財布だろう。どうして郵便受けに？」

「実は、昨日帰る途中になくしたんだ。誰かが届けてくれたのかな」

「へえ。タクシーに乗る前に落とした財布をわざわざ？」

自分でも、苦しい言い訳だと思った。昇は全く信じていない。疑いのまなざしを向けている。

「遅刻するから、またあとで！」

昇の手から財布をかすめ取り、十無はその場を逃げるように出勤した。

財布には免許証も入っていた。その住所を見て、アリアはここまで来たのだろう。しかし、わざわざ財布を返しに来たのは何のためなのか？

電車に乗ってから、財布の中身を改めたが、なくなっているものは何もなかった。アリアのとった行動は、十無の想像力を超えていた。十無は頭の中の整理がつかない状態で出勤したのだが、勤務中は上司への報告と書類に追われ、そのことについて考える余裕はなかった。

Dの件は、本庁にも報告されたが、旭川で起きた窃盗事件は、園田豊子の単独犯の可能性も考えられ、都内で起きた事件との関連性は薄いとして、広域犯罪として扱われることなく、所轄での捜査継続という判断となった。

書類がひと段落し、十無はふとアリアのことを調べてみようと思った。

しかし、過去の犯罪者データベースに照会しても該当する人物はいなかった。逮捕歴はないようだ。念のため、少年係にそれとなく聞いてみたが、管轄内で把握している中に、そんな特徴の少年はいないという。

これ以上、何の手掛かりもない。東京の何処かにいるというだけでは、探しようがない。

夜八時。あつという間に一日が過ぎ、気がつくと、窓の外が暗かった。

徒労に終わり、どっと疲れが出た。それに、お腹も空いてきたので、十無は仕事を切り上げて帰宅することにした。

何処かで食べてから帰ろうか。

十無は昇と顔をあわせなくなかった。会えば、財布の件を掘り葉掘り訊かれ、面倒な言い訳をしなければならない。

居酒屋で夕食を済ませるために、十無は池袋西口の繁華街に出た。JR駅前の明治通りは、川の流れのように行き交う人が流れていく。久しぶりの人ごみは、息が詰まる感じがした。

十無は人の流れに沿って、とりあえずサンシャイン通りをぶらぶらと歩いた。

「義兄さん！」

聞き覚えのあるアルトの声が、十無の耳に飛び込んできた。

「あいつだ！」

声がした方へ走り、人がやっとすれ違えるほどの、細い路地裏へ入った。

「おいっ！」

十無は背後から、その男の右腕を掴んだ。

「離せ！」

男は突然のことに驚き、腕を振り解こうとしたが、十無の腕力の方が遥かに勝っていた。

もう一人、誰かいたようだが、すでに姿はない。

「お前、アリアだろう？」

「……へえ、刑事さん。よく私だつてわかったね」

アリアは十無を見下すように鼻で笑いながら、すんなりと認めた。これまでと外見が全く違っている。ベージュ色のトレンチ風、スプリングコートを着て、黒いサングラスに、肩までの髪といういでたち。

多分、姿を先に見ていたら、アリアだと気がつかなかったかもしれない。

「で、何の用？」

アリアは不機嫌そうに言った。

「まずは、署まで来てもらう」

十無は掴んでいる右腕を離さないまま言った。

下手に暴れると公務執行妨害で引っ張られるとも思ったのか、アリアは抵抗をせず、されるがままになっている。

「勘弁してよ、忙しいんだから」

「そうはいかない。園田豊子は自供したということだ。だが、肝心のダイヤがない。お前の言ったように、シャンドリアに隠していたのは確かかなようだが」

「へえ、そう」

「……お前、盗っただろ？」

「知らない」

アリアは涼しい顔をして、さらっと言つてのけた。

「その辺をじっくり訊かせてもらう」

「やだよ、証拠もないのに無茶苦茶だ。腕を離して」

「だめだ、また消える気だろう？」

「そんなに私から訊き出したいの？」

「当たり前だ。Dのこともお前が鍵を握っているだろう？」

「Dなんて会ったこともないのに。信じてくれないの？」

さっきまでの威勢のよさは身を潜め、声のトーンが落ちてアリアは急にしおらしくなった。

「……あくまでも、任意同行だ。知っていることを話してほしいだけだ」

調子が狂う。なんだかこっちが悪者のようでやりづらい。

アリアの右腕を掴む十無の手が、少し緩んだ。

「知っていることを話せばいいの？ 刑事さん、私のこと信じてくれる？」

「正直に話してくれたら、最後まで面倒を見てやる」

嫌に素直だ。何か裏があるのか。

十無は警戒した。さっき一緒にいた男が、また来るのか。それとも他に、逃げる算段でもあるのか。

「わかった、言うとおりにする……」

サングラスの奥から、アリアはじつとこちらを見つめているようだ。

気がつくのと、今までの男っぽさがなくなり、女性の仕草になっている。

「なんだ？」

「うん……刑事さんて、彼女いるの？」

「そ、そんなことどうでもいいだろう？」

「……私のことどう思う？」

「どうって」

「十無、私は……私の気持ちは、あの夜と同じ……」

アリアは十無に掴まれていない左手を、そっと十無の頬に当てた。

「おい……」

予想もしない展開に、十無はうろたえた。

表通りには多くの通行人がいるというのに、二人がいる薄暗く細

い路地の奥は、別世界のように人気がなかった。

次の瞬間、十無の胸にアリアは顔を埋めた。その拍子に十無はよろけて建物の壁に背中をついた。

「ずっと一人だった……」

「そうひつつくな」

「十無、私のこと嫌い？」

アリアはアルトの声をやや高くしてそう囁き、体を寄せた姿勢で十無の顔を見上げた。

今のアリアは、どう見ても女性にしか見えない。

「って……俺は……」

アリアの右腕を捕まえていたはずの十無の手は、いつの間にか離れ、体を壁にぴたりとつけて逃げ腰になっていた。ここから離れるわけにはいかない。

十無は辛うじてその場に棒立ちになっていた。

「私は……女の姿で会いたかった」

十無を見つめながら、アリアは小首を傾げてかすれた声で囁いた。アリアは十無の肩に両腕を回した。アリアの顔から目が離せない。それは、どういう意味だ。まさか、俺のことを……。

「十無……」

アリアの顔がゆっくりと近づく。

目の前にいるアリアの行動に、思考が追いつかない。

十無は瞳を閉じて、柔らかな唇を受け入れてしまった。

何も考えられなかった。刑事という立場も忘れ、どうでもよかった。ただ、アリアが愛しい。

一瞬、本気でそう思った。

「……自分を、粗末にするな」

十無は振り絞るようにそう言い、やっとの思いで、アリアの腕を振り解いて体を離れた。

アリアは予想外とでもいうように、きょとんとしていた。そして、少し寂しそうに肩をすくめて、口の端に笑みを浮かべた。

「そんなこと、言われると思わなかった」

「本心では、ないんだろう？」

「ふふ。こうすると、大抵、逃げられるって義兄が言っていたから」
そう言ったアリアの態度は、もう男に戻っていた。

「そんなことだと思った」

口ではそう言ったが、十無は内心がっかりしていた。「違う」と否定してほしいと思っていた。

「もっと、男の落とし方に、磨きをかけなきゃね」

アリアが言うと、冗談に聞こえない。

「体を安売りするような馬鹿な真似はするな。今に痛い目に遭うぞ」

「まるで、女の子扱いだ。余程、私が女に見えるのかな」

「俺は、本気で心配して……」

「本当に、もう……刑事さんは優しすぎる」

アリアは俯いて、柔らかなアルトの声で呟いた。子供が拗ねているような仕草だ。

君が可愛く感じてしまう。一緒にいると、自分を見失いそうだと俺はどうしたらいい。

軽い眩暈。胸の奥にくすぶる焦燥感。十無はアリアを抱き締めた衝動に駆られたのだが、勤めて冷静な口調で話して理性を保っていた。

「俺のアパートに、何故、わざわざ財布を届けた？」

「だって、ないと困るでしょう？」

アリアは悪戯っ子のように笑っている。

「そういうことを訊きたいのではなくて……」

「じゃあ、どういうことを訊きたいの。私の……気持ち？」

笑顔が一変し、押し殺したような声で、アリアは十無に問いかけてきた。

アリアの閉ざされた心の鍵に、十無は手をかけてしまったのだ。

「刑事のあなたに、なんて言ったらいいの。あなたのことが好きになったから、アパートまでこっそり行きました。好きですって、言

「つたらしいの？」

アリアは責めるように語彙を荒げて詰め寄り、コートが触れるほどの位置から十無の瞳を見つめた。

十無の鼓動が早まった。

アリアの素を見た気がした。きっと、これが本来の姿。男も女も混在している、どちらとも言えない立ち振る舞い。

「いや、そんなつもりじゃ……」

あからさまに気持ちるぶつけてきたアリアに圧倒され、受け止めきれずに十無は口ごもった。

「私の心に、土足で上がりこむな！ これ以上、私にかかわるな！」
悲痛な叫び。

思わず十無はアリアを強く抱き締めていた。

「君を……追い詰めるつもりはなかったんだ」

これは同情だろうか。いや、なんだっていい。

十無は後先考えずに、行動に走った。何事にも慎重すぎる十無にとって、信じ難い行動だった。

アリアの顎を引き、激しく唇を奪ったのだ。

長く激しいキス。相手の全てを手に入れない衝動。欲情が荒々しく駆け巡り、十無の体中を支配していた。

抗うアリアを無理矢理壁に押し付けていた。

「十無、いやだ！」

アリアの首筋に唇を這わせ、左手でアリアの体を押さえ込み、アリアのベルトに手をかけた。

「だめっ！」

アリアは頬を紅潮させて息を弾ませながら、震える声でおびえたように哀願した。それでも十無の手は止まらなかった。

「十無、刑事でしょ！ こんなこと、だめっ……」

首筋に唇を這わせる度に、アリアの息が荒くなる。アリアが上気するにつれ、甘い香りが漂う気がした。

十無はジッパーに手をかけた。

「馬鹿野郎！」

アリアが叫んだと同時に、十無の股間に激痛が走った。

「……つつう」

アリアが思いつき、十無の急所を蹴り上げたのだ。十無は、その場にしゃがみこんだ。

「十無が悪いんだから……十無が……」

十無は激痛で、顔を上げられなかったのだが、頭上から聞こえるアリアの声は泣いているようだった。

アリアは路地裏に消えた。

「泣きたいのはこつちだ！」

十無は壁に寄りかかり、ビルの谷間から見える星もない狭い夜空を見上げて、額に手をやった。

「俺は、なんて馬鹿なことを……」

うつたえていた。強姦まがいの行動をとってしまった自分が信じられなかった。

「男相手に……泥棒に……俺は……どうすりゃいいんだっ！」

十無は力任せに、ビルの壁面を拳で叩いた。

東京はこれから桜の美しい季節だというのに、十無の春は一瞬のうちに散ったのだった。

7・愛情

神田川沿いの桜は満開だった。

四月上旬の昼下がり、都電に乗って面影橋駅で降り、アリアとヒロは神田川沿いを歩いていった。

やり場のない、沈んだ気持ちを少しでも晴らしたくて、アリアは桜を見に来たのだった。

街角で刑事に会ってからというもの、部屋に閉じこもって自分を責めてしまうのだ。

私は刑事相手に、なんて馬鹿なことを言っただろう。

『……好きですって言っただけなの？』

そんなこと、言うつもりじゃなかった。刑事から逃げるための、いつもの色仕掛けだったはずなのに。東十無……刑事のくせに、刑事なのに、どうしてあんなに優しいのだろう。

心地よい春風に吹かれながらも、アリアの頭の中は東十無のことで一杯だった。

「綺麗、桜吹雪だ」

桜の枝が川に向かって覆いかぶさり、そよ風が吹く度、はらはらと花弁が散る。

「確かに綺麗だな」

アリアの横に並んで歩くヒロが、欠伸をしながら言った。

「無理して褒めなくてもいいよ」

「本当に綺麗だと思うよ。ただ、ちょっと眠くて辛いが……」

ヒロは再び伸びをしながら欠伸をした。

深夜遅くまで起きているヒロは、夜の生活といってもいい。

「ごめん、無理言っつて」

「いや、たまには陽に当たるのもいい。欲を言えば、可愛い女の子と並んで歩きたかったが」

アリアの黒いサングラスに白いワイシャツという、男の姿を眺め

ながら、ヒロは肩をすくめた。

ヒロの茶色がかった長い髪が、風にそよいでいる。ヒロはティーシヤツにジーンズという、珍しくラフな格好をしていた。

ヒロは何かあったのかとは訊いてこないが、きつと感じている。だからこんなにも優しいのだ。

大切なヒロ。ヒロにこれ以上心配をかけさせてはいけない。

アリアは勤めて明るい調子で話した。

「私がヒロに預けたダイヤは、Dに渡ったの？」

「ああ、とても喜んでいたよ。その代わり、こちらには金が入る」

「Dって、宝石が好きなの？」

「そうらしい」

「女の人なんでしょう？」

「気になるのか」

「ヒロの恋人？」

「馬鹿、そんなはずないだろう。俺にはお前がいる」

アリアは冷やかしのつもりで言ったのだが、ヒロは立ち止まってアリアに向き合うと、真面目な口調で強く否定した。

「私は妹だもの。ヒロに恋人がいたってそれは別でしょ？」

「血のつながりはないから、妹じゃない」

「でも、私にとってヒロは……」

「こんなつまらん話しは、やめよう」

ヒロが遮ったのでアリアは押し黙った。

ヒロにはいつも、誰かしら女性がいるのは前から知っていた。特定の女性であることは今までなかったようだが、もしかしてこのDは特別な人なのかもしれない。

そうだとしたら、ヒロが自分だけのものではなくならない寂しさを、アリアは感じていた。

「俺は、お前がそばにいてくれたらそれでいい」

ヒロの長い指がアリアの髪を撫ぜ、アリアはそのまま抱き寄せられた。

ヒロの厚い胸板は、愛用している煙草の匂いがした。ティーシャツの下から、ヒロの体温が伝わってくる。規則的に打たれる心拍。それらが、アリアに安心感を与えてくれる。

このままずっとヒロを頼っていて良いのだろうか。

ヒロだって、私にばかりかまけているわけにもいかないだろう。いつまでもこのままではいけない。一人で生きていけるようにならないければ。

そう思いながら、いつもヒロの胸に寄りかかってしまう、だめな自分。

「ヒロ、人が見てる」

「構わない」

川の間こうを歩く通行人が、目のやり場に困ったように、ちらりと見ては目をそらしていく。

「私は構う！」

アリアはヒロの胸から離れた。

「ふん、何が恥ずかしいんだ」

「だって、男の格好をしているし……」

「じゃあ、女の格好をしている時は、大っぴらにやって構わないのか」

ヒロは意地悪く、ニヤニヤしている。

「いや、そうじゃなくて」

「じゃ、いつでも同じことだ」

ヒロは手馴れたように腰に手を回してアリアの体を引き寄せ、片手でアリアの顎を引いて唇を寄せた。

「いやだっ！」

アリアは思わず、ヒロの手を払いのけてしまった。

冗談半分にヒロがキスすることは、日常茶飯事だったのだが、アリアは今までそれを、こんな風に強く拒絶したことはなかった。

「お前……」

ヒロの顔が陰しくなった。

「ごめん、何でもない」

「何かあったとは思っていたが……男か」

「何もない」

「男だろう？ まさか、旭川で会った刑事か」

ヒロの口調が厳しくなった。

「違う！」

「お前が女だと知っているのか」

「そんなこと、知るはずがない」

しまった、と思った。

つい、むきになってしまった。ヒロは変に思ったに違いない。

張詰めた空気と気まずい沈黙。

ヒロはアリアの心の動きを観察しているかのように、黙ってアリアを見つめている。

どうしよう。ヒロは怒っている。ヒロに嫌われたくない。もう、

一人はいや。ヒロがいなくなったら嫌だ。

「ヒロ、違う。刑事を引っ掛けるのに、ちょっと色々あって……それで、今は思い出すようなことをしたくないだけ」

「……キスでもしたのか」

また墓穴を掘ってしまった。これ以上話すと、また余計なことを言ってしまうそうだった。

「だって、『仕事』でしょう？」

「まあ、いい。どうせもう会うことはないだろう」

つい数日前に、偶然会ったとは絶対言えない。おまけに、危なく乱暴されるところだったなんて。

「おい、口直ししてやる」

言うが早いのか、ヒロは両手でアリアの顔を包み込むように掴み、キスをした。

奪うようなキスだった。

アリアは抵抗しなかった。抵抗したら、このままヒロに置き去りにされそうだったから。

ヒロから離れたいという思いがある反面、アリアはヒロに依存していた。

孤独はいや。

母親との辛い生活を続けてきたアリアにとって、ヒロは唯一無二の家族だった。

ヒロしかいなかった。この時のアリアにはヒロが全てだった。

アリアはヒロの腕の中で、優しく抱き締められた。

「お前が、好きだ」

「私もヒロが好き」

アリアがそう言つと、ヒロは寂しそうに笑った。

「どういう意味であれ、嬉しいね」

嘘ではなかった。アリアは本当にヒロが好きだと思っていた。ただ、義兄に対する家族愛なのか、恋人に対する愛なのか、自分でもよくわからないでいたのだが。

ヒロは私を愛してくれている。でも、私は本当にそれに応えることができるのか。ただヒロの愛情を利用しているだけではないのか。ヒロの腕から抜け出そうとしない自分がいやだった。

アリアは桜吹雪の中、揺れ動く感情を抱え、温かいヒロの腕に身を委ねていた。

「今日、アリアちゃんと会っていたでしょう？」

「何故わかる？」

「そりゃあ、ヒロの浮かれた顔を見たらわかるわよ」

Dはそう言つて、隣の椅子に座ったヒロの頬を、人差し指でつついた。

いつもと同じで、アリアとは何も進展はないのだがと思い、ヒロは肩をすくめた。

その夜、ヒロはホテルのバーでDと待ち合わせをしていた。

今夜のDは、控えめな服装だった。

といっても、元来、派手な顔の造りに、モデルのような体型。長

い髪をアップにし、伊達眼鏡にグレーのタイトスーツ姿でOL風を装っても、人目を惹いてしまう。

「その服装、あまり合わないな」

ヒロは苦笑した。

「あら、そう？ …… 私もちよつと無理があると思ったのよね」

ヒロは長い髪を束ねてサングラスをかけ、黒いシャツにノーネクタイで、紫色の上着を着ていた。

「これじゃまるで、OLとそのヒモって組み合わせね」

「酷いたとえだな」

くすくす笑うDにつられて、ヒロも笑った。

「ねえ、そんな面倒なアリアちゃんより、私に鞍替えしたら？」

冗談とも、本気とも取れる笑みを浮かべ、Dは大きな瞳でヒロを見つめた。

Dの気持ちを知らないわけではなかった。自分はそれに応えられないということも、よくわかっていた。だが、時折、どうしてもなく人肌が恋しくなる。

そんな時、その場限りの女性と一夜を過ごしてきたのだが、Dと出会ってから、なんとなく、Dに会いに行くようになっていた。

今夜も、一人でいるのがいたたまれなくなった、そんな夜だった。

「冗談よ」

黙っているヒロを見かねて、Dが言った。

「ヒロは、アリアちゃん一筋ですものねえ。一途なこと」

「茶化すな」

「いいじゃない、このくらい言わせて頂戴」

そう言われると、ヒロは何も言えなくなった。

俺は最低の男だ。Dを都合のいいときだけ利用しているのだ。

「いやねえ、そんなに真面目に取らないで。苛めがいなくなるじゃない」

明るく笑い飛ばし、Dはソルティ・ドックを飲み干した。

「私は……構わないのよ」

Dは空のグラスに目を落として呟いた。
気丈なDが可愛いと思った。Dを愛していれば、自分もDも幸せだったのだろくに。

しかし、気持ちばかりはどうにも変えられない。悩んでもどうすることもできないのだ。

「ヒロ、折角のマティーニが台無しよ」

口をつけていないマティーニのカクテルグラスが、水滴で濡れている。

ヒロはグラスを手にし、何かが吹っ切れたようにマティーニを飲み干した。

「さて……女王様、我が褥じゅうにいざ招かん」

ヒロは立ち上がると、Dの横で身を屈め、芝居がかった台詞を吐いて、仰々しくDの手をとり口付けした。

周囲の客の視線が集まる。

さながら、中世の騎士気取りだが、ヒロがやるとさまになっていた。「馬鹿、こんなところで恥ずかしいじゃないの」

そう言っていたが、Dは本気で怒ってはいない。楽しんでいるようだった。

「あなた様のためならば、いかなることでも不可能なことなどありません。何なりとお申し付け下さいますよう」

ヒロは、『騎士』を続けている。

「いいでしょう。では、私わたしをそなたの褥に連れて行っておくれ」

「有り難き幸せ。では、少々のご無礼をお許し下さい」

立ち上がったDに、ヒロはウインクして、軽々とDを両腕に抱き上げた。

ヒロはDを抱き上げたまま、ホテルの部屋へと向かった。

バーにいた客、すれ違う客の視線が、二人に釘付けになったのは言うまでもない。

細い路地裏でアリアを見つけたあの夜から、東十無は酷く落ち込

んでいた。

双子の弟、昇にも相談できず、一人で悩みを抱え込んでいた。悩んだところでどうしようもないことはわかっているのだが。

一向に上向かない気持ち。だからといって、アリアのことを忘れられそうにもなかった。

とにかく忘れられない。あとはもう、あいつを見つけるしかない。見つけたからといってどうしたら良いのかわからないが、何もしていないよりはましだ。

無茶苦茶な理論のもと、十無は怪盗Dを追いながら、仕事の合間、地道にアリアの影を追い続けた。

だが、それらしき人物の影を見つけても、

「刑事さん、根を詰めると体壊すよ」

などとからかわれ、まともに向き合えずにするりと逃げられて終わる、といった具合だった。

アリアの居所を突き止めなければ、逃げられてばかりだ。

そして、とうとう年が明けて正月が過ぎ、諦めかけていた頃、街中の雑踏で、十無は女子高生に声をかけられたのだった。

「刑事さん、アリアに宜しくね」

十無はまたもや財布をすられるという失態を犯した。

それも、女子高生に警察手帳ごと。

これはもう、恥を忍んで昇に協力してもらう他なかった。

十無が仕事の傍ら、一年かけて突き止められなかったアリアの居所を、という裏情報網を駆使したのか、昇は数日間という短期間の間に見つけ出してしまったのだ。

昇は人探しが飛びぬけてうまいのだ。

こんなことであれば、初めから昇に頼めばよかったと、十無は思った。

そして、今回もアリアは何事もなかったように、馴れ馴れしく話しかけてきた。

だが、十無はまともに話ができず、目をそらした。

お前は平気なのか。何故何もなかったように、普通に話しかけてくるのだ。

そんなことに戸惑っているうちに、また別の不安が頭をよぎった。アリアを見る昇の眼が、気になったのだ。

まさか、昇……。

十無はまた一つ、不安を抱えることになった。

こうして東十無は、アリアに翻弄される生活が続くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2209a/>

地方都市物語・6・出会いの運命

2011年5月5日11時56分発行